

1. はじめに

近年、現実の図書館をめぐる動向に関しては、つねに、新たな展開が報じられる状況にある。たとえば、公共図書館を中心に据えた市街地の再開発が全国で進む中で、図書館を中核施設とする大型の複合施設、「大和市文化創造拠点（シリウス 2016 年開館）」（神奈川県大和市）¹⁾や、「安城市中心市街地拠点施設（アンフォーレ 2017 年開館）」（愛知県安城市）²⁾、が多数の入館者を集めて話題となった。

2018 年には、市街地の商業施設を改装した都城市立図書館と関連施設「都城中心市街地中核施設（Mallmall）」（宮崎県都城市）³⁾が開館した。また「高知県立図書館」と「高知市民図書館本館」を『合築』するという「全国でも例を見ない手法」で注目された「オーテピア高知図書館」⁴⁾が、高知市の市街地中心部に開設され、2018 年 9 月には「オーテピア」を会場として、「図書館総合展」の地域フォーラムが行われた。⁵⁾他にも、新国立競技場の設計者として知られ、富山市立図書館本館を手がけた、隈研吾設計による、「ゆすはら雲の上の図書館（高知県梶原町）」⁶⁾が 2018 年 5 月に、「守山市立図書館（滋賀県守山市）」⁷⁾が 2018 年 11 月に開館した。さらに、CCC が運営する図書館には、多数の市民が来館していることが報じられているが、⁸⁾CCC 運営による全国で 5 カ所目の「徳山駅前図書館（山口県徳山市）」⁹⁾が 2018 年 2 月に開館して 1 年で 200 万人の入館者を記録し、新たに「南海和歌山市駅」に、図書館施設を運用する計画が進行している。¹⁰⁾一方、札幌市では、中心市街地の一角に「札幌市図書・情報館」が開館し、「本を貸出しない図書館」という運営で注目された。¹¹⁾

施設面での新たな展開に対して、公共図書館の職員に関しては、これまでも非正規公務員をとりあげた際に、話題とされてきたが、2018 年には、実施には至らなかったものの、練馬区立図書館で、職員によるストライキが企画されたことが、報じられた。¹²⁾

これらは、2018 年の図書館に関する報道の中で、ほんの一例に過ぎない。全国において、図書館をめぐる多様な状況が出現していると言えよう。

注)

1) 「2 年連続 300 万人！シリウスが累計来館者数 600 万人に」

(http://www.city.yamato.lg.jp/web/tosho/tosho20180707/_00002.html)

2) 「アンフォーレ本館入館者 200 万人達成について（平成 31 年 1 月 10 日掲載）」

(<https://anforet.city.anjo.aichi.jp/oshirase/20190110-2million.html>)

3) 「都城市立図書館、来館者 50 万人突破 今年 4 月にリニューアル」『ひなた宮崎経済新聞』2018.9.7

- (<https://miyazaki.keizai.biz.headline/182/>)
「宮崎・都城の図書館が来館者 100 万人達成 グッドデザイン賞受賞も後押し」『ひなた宮崎経済新聞』2019.2.18
- (<https://miyazaki.keizai.biz.headline/298/>)
- 4) 「オーテピア開館 合築の成果が問われる」『高知新聞』2018.7.24
(<https://www.kochinews.co.jp/article/201614>)
「高知市「オーテピア」早くも 10 万人 開館から 24 日で達成」『高知新聞』2018.8.18
(<https://www.kochinews.co.jp/article/208035>)
「「オーテピア」来館 50 万人超 科学館は目標の 2 倍 開館 5 カ月」『高知新聞』2018.12.28
(<https://www.kochinews.co.jp/article/242808>)
- 5) 「2018 年 9 月 22 日 (土)、図書館総合展 2018 フォーラム in 高知 開催のお知らせ」
(<https://www.libraryfaif.jp/news/6831>)
- 6) (<http://kumonoue-lib.jp/>)
「梶原町「雲の上の図書館」来館 10 万人祝う」『高知新聞』2019.2.26
(<https://www.kochinews.co.jp/article/256651/>)
- 7) 「滋賀・守山に新市立図書館 設計担当の隈研吾さんが講演『居間のようにくつろいで』」
『産経新聞』2018.11.2
(<https://www.sankei.com/west/news/181102/wst1811020011-nl.html>)
- 8) CCC が運営を担当した最初のケースである武雄市図書館は、来館者が「2013 年 4 月の新装オープン以降、500 万人に達し」たことが、報道された。
「武雄市図書館、来館 500 万人」『読売新聞』2019.2.17
(<https://www.yomiuri.co.jp/local/saga/news/20190216-OYTNT50106/>)
- 9) 「徳山駅前図書館 200 万人 オープン 1 年、餅まきでお祝い」『山口新聞』2019.2.4
(<http://www.minato-yamaguchi.co.jp/yama/news/digest/2019/0204/3p.html>)
- 10) 「南海和歌山市駅」に開館が予定されている図書館については、「ツタヤ図書館、建設で談合疑惑浮上…和歌山市、入札前から特定業者と資金計画について会議」『Business Journal』2019.2.17、などの報道もある。
(<https://biz-journal/2019/02/post/27713.html>)
- 11) 「札幌市図書館」のホームページでは、「図書・情報館の特徴」について、「本の貸出機能に重点を置いた従来の図書館とは異なり、調査相談・情報提供に力を入れた『課題解決型』図書館です」「最新の情報をお伝えするため、『行けばいつでも読める』ように館内の図書は貸出しません」と、記載されている。
(<http://www.city.sapporo.jp/toshokan/infolibrary/index.html>)
- 12) この件に関しては、多数のメディアで扱われたが、たとえば、下記。
「練馬区立図書館、司書のストライキ回避 区教委と対立」『朝日新聞』2018.12.18
(<https://www.asahi.com/articles/ASLDL55P8LDLUTIL032.html>)

2. 2018年のメディアにおける図書館を扱った事例

現実の状況を反映するように、2018年の各種のメディアにおける図書館に関する扱いは、「1. はじめに」でとりあげたさまざまな図書館の紹介報道だけでなく、図書館を多様な観点から記述した特集が、いくつかみられた。

たとえば、雑誌では、「こんな図書館のあるまちに住みたい」（『地域人』1）、「Library本がつなぐ新しいコミュニケーションの場」（『男の隠れ家』2）、「図書館の未来」（『現代思想』3）、「公共図書館を考える」（『三田評論』4）が、図書館に関係した記事で特集を掲載している。それぞれの記事の内容も、図書館づくりにおける住民参加、さまざまな機能をあわせもつ複合施設としての図書館、建築的な特徴のある図書館施設、多様な図書館サービスの展開、今後の図書館運営の方向性、図書館職員の在り方、など、いずれも、図書館に関係する「図書館現象」とでもいうべき事象が多様な観点から扱われており、それだけ、図書館という施設が、地方財政の危機が取りざたされている中でも、改装や新設がすすめられている現実と合わせて、一定の注目をあつめていることを示していると言えよう。

こうした点について、『つながる図書館』5)の著者、猪谷千香は、『現代思想』の「特集 図書館の未来」に掲載された、『走れ！移動図書館』6)の著者、鎌倉幸子との対談において、「全国の図書館を見て思うのは、『良い図書館』に正解はないということですね。ある図書館で成功した試みが、他の図書館に当てはまるわけではなく、「貸出冊数や来館者数でも図書館の価値は測れない。その地域に必要とされる図書館を地域の方々が自分たちの手で作っていかねばならないと痛感しています」（p.26）と述べている。7)

テレビ番組で、図書館を扱った例として、たとえば、NHKの番組では、『ドキュメント 72時間』「島へ 山へ 走る図書館」（2018年5月18日）8)で、「およそ2800冊の本を積んで松山市内を走るトラック。40年以上の歴史がある移動図書館。過疎がすすむ山間部から、フェリーに乗って島へと渡り、人々に本を届ける。全国的には少なくなった移動図書館だが、何故か松山では利用者が増えている」という内容が、放送された。

また、「NHK BS プレミアム 『美の壺』」（2018年6月23日）9)では、「暮らしの中に隠れたさまざまな美を紹介する、新感覚の美術番組」のなかで「歴史的な図書館から、未来的なデザインのものまで、全国の個性豊かな図書館を紹介！！」として、「宮城県立図書館」「国際教養大学中島記念図書館」「甲良町立図書館（滋賀県）」「成蹊大学図書館」「京都府立植物園きのこ文庫」「洲本市立洲本図書館（兵庫県）」が、紹介された。

さらに、NHK『AIに聞いてみた』（2018年10月13日）10)では、「健康寿命」がテーマとしてとりあげられ、健康と「本や雑誌を読むこと」とは関係があり、健康寿命が長いとされる山梨県は、「人口に対する図書館の数が全国1位」であり、「公立小学校での学校司書の配置率が高い」ことが紹介され「健康寿命を伸ばすために『本や雑誌を読む』ことや図書館の存在がカギとなっていくのではないのでしょうか」とされた。

図書館を扱ったテレビ番組でも、その観点は、移動図書館の利用者（『ドキュメント 72

時間』)、図書館施設 (『美の壺』)、読書と健康の関係 (『A Iに聞いてみた』)、など、それぞれ異なっていた。そうした多様な取り上げ方が、今日の図書館では、可能になっていることのあらわれであると言えよう。では、2018年のフィクションの作品の中では、図書館は、どのように描かれていたのだろうか。

たとえば、テレビドラマの中で、『リポート』11)では、原作で、異なる設定だったヒロインの職業が、図書館に勤めているという設定になっており、『高嶺の花』12)では、メインキャラクターである人物が、図書館で本を借りるというシーンが放映された。

注)

1) 「こんな図書館のあるまちに住みたい」『地域人』vol.33、2018.6、pp.12-55

特集「こんな図書館のあるまちに住みたい」pp.12-13

特集鼎談 猪谷千香 (記者、文筆家)・佐藤美加 (図書館流通センターサポート推進室) エリアマネージャー)・仲俣暁生 (編集者、文筆家)「地域の魅力を増すために図書館が担う新たな役割とは？」pp.14-21

PART.1 住民とつくり上げる図書館

「瀬戸内市民図書館 岡山県瀬戸内市」 「建設から運営にまで市民の声を反映しコミュニティを活性化」 pp.22-25

「小布施町立図書館まちとしょテラス 長野県」 「誕生から9年の時を経て町と共に緩やかに育つ図書館」 pp.26-29

「指宿図書館・山川図書館 鹿児島県指宿市」 「地元女性たちが管理・運営 本と人、人と人を繋ぎ体験する場として図書館の枠を超えた挑戦」 pp.30-33

「島まるごと図書館構想 島根県海士町」 「『島全体を図書館に』住民の想いが見事に結実」 pp.34-37

「男木島図書館 香川県高松市」 「瀬戸内海の島の図書館が人々を惹き付ける理由」 pp.38-39

PART.2 複合化する図書館

「みんなの森ぎふメディアコスモス (岐阜市立中央図書館) 岐阜県」 「若い世代に支持される新・滞在型図書館」 pp.40-43

「武蔵野プレイス (武蔵野市立ひと・まち・情報創造館) 東京都武蔵野市」 「4つの機能の融合により新たな知的な交流・創造が生まれる“滞在型”図書館の先駆的存在」 pp.44-46

「中心市街地拠点施設アンフォーレ (安城市図書情報館) 愛知県」 「飲食自由・私語自由を実現した“常識にとらわれない”図書館」 pp.47-50

PART.3 まちライブラリー

磯井純充 (まちライブラリー提唱者、森記念財団) 「単に本を読む場ではなく人との繋がりをつくる私設の図書館」 pp.50-52

「活気づく！大阪のまちライブラリー事例」 53-55

3) 「お気に入りの一冊に出会える本のある空間。」 「PART. 3 Library 本がつながる新しい

コミュニケーションの場』『男の隠れ家』 vol.22、no.12、2018.12、pp.61-75

(PART.1 Select Bookstore 店主こだわりの本が並ぶ書店 pp.25-39)

(PART.2 Book Cafe 珈琲を味わいページをめくる静かなひと時 pp.41-55)

(Column 「泊まれる本屋で眠る BOOK AND BED TOKYO」 pp.56-60)

PART. 3 Library 本がつなが新しいコミュニケーションの場 pp.61-75

「グローブの温かな光に包まれ、世代を超えて人々が集う滞在型図書館 岐阜市立中央図書館 みんなのもり 岐阜県岐阜市 2015年オープン」 pp.62-63

「外壁に約6000個の丸窓を配置するなど、斬新なデザインが話題の市民憩いの場 金沢海みらい図書館 石川県金沢市 2011年オープン」 pp.64-65

「懐旧の赤レンガ倉庫と現代的な建築を融合 北区立中央図書館 東京都北区 2008年オープン」 p.66

「大和市の文化複合施設の中核をなす 大和市民図書館 神奈川県大和市 2016年オープン」 p.67

「滞在型図書館を目指す温もりの空間 飯能市立図書館 2013年オープン」 p.67

「曲面に沿って書架がアールを描いて並ぶ円形コロシウムのような本の殿堂 水戸市立西部図書館 茨城県水戸市 1992年オープン」 pp.68-69

「明治時代の小学校を基にした歴史町の図書館 高山市図書館煥章館 岐阜県高山市 2004年オープン」 p.70

「仙台の繁華街から近く気軽に立ち寄れる 仙台市民図書館 宮城県仙台市 2001年オープン」 p.71

「さらに創造性をもたらす知と感性の拠点 太田市美術館・図書館 群馬県太田市 2017年オープン」 p.71

「建築家・隈研吾氏が手がけた、人と情報を結ぶスパイラルな吹き抜け構造 富山市立図書館本館 富山県富山市 2015年オープン」 pp.72-73

「刻一刻移り変わる環境が映し出される 赤穂市立図書館 兵庫県赤穂市 2002年オープン」 p.74

「雲の上で本と木組みに包まれる心地よさ 梶原雲の上図書館 高知県[高岡郡]梶原[町] 2018年オープン」 p.74

「本を通してライフスタイルの提案を進める 武雄市図書館・歴史資料館 佐賀県武雄市 2013年リニューアルオープン」 p.75

「まちに創造性をもたらす、知と感性への刺激 北九州市立中央図書館 1975年オープン」 p.75

3) 「図書館の未来」『現代思想』 vol.46、no.18、2018.12、pp.8-180

岡本真 (インタビュー) 「図書館は民主主義の学校である」 pp.8-19

猪谷千香、鎌倉幸子 (討議) 「新しい公共の場」 pp.20-28

嶋田学 「図書館と『ものがたり』」 pp.29-38

- 新出「“公共”図書館の行方」 pp.39-51
- 高橋真太郎「人と共にある図書館の未来は明るい」 pp.52-58
- 小川直人「図書館を持つ複合の場から」 pp.59-68
- 鈴木一誌「多からなる一 フレデリック・ワイズマン監督『エクス・リブリス ニューヨーク公共図書館』」 pp.69-77
- 川崎安子「ライフスタイルに溶け込む図書館 武庫川女子大学附属図書館の実践」 pp.78-95
- 岡友美子「二つの図書館を有すること 近畿大学アカデミックシアター 知の実験劇場」 pp.96-107
- 中村覚「大学図書館とデジタルアーカイブ 東京大学における取り組みを例として」 pp.108-113
- 今井福司「学校図書館という選択肢」 pp.114-121
- 鷺津影織「孤独と連帯の回遊」 pp.122-127
- 呑海沙織「多様性を許容する図書館 認知症にやさしい図書館を考える」 pp.128-137
- 鎌倉幸子「災害と図書館 情報の拠点を支える災害・復興支援」 pp.138-146
- 長尾宗典「岐路に立つ図書館 図書館の歴史から見えてくること」 pp.147-158
- 高野明彦「図書館、未来の書棚、連想」 pp.159-171
- 福島幸宏「これからの図書館員像 情報の専門家/地域の専門家として」 pp.172-180
- 4) 「公共図書館を考える」『三田評論』2018.7、pp.10-41
- 座談会 松井清人/猪谷千香/吉井潤/酒井恵子/糸賀雅児「変わりゆく図書館 知の拠点は今」 pp.10-25
- 片山善博「図書館を大切に扱うには」 pp.26-31
- 薬袋秀樹「日本の公共図書館の現在と未来 明日の社会の発展へ向けて」 pp.32-37
- 安田恵子「地方公共図書館に勤めて思うこと」 pp.38-41
- 5)猪谷千香『つながる図書館 コミュニティの核をめざす試み』筑摩書房（ちくま新書）、2014
- 6)鎌倉幸子『走れ！移動図書館 本でよりそう復興支援』筑摩書房、（ちくまプリマー新書）、2014
- なお、両者については、下記で扱った。
- 佐藤毅彦「女性著者による新書版図書館書籍『つながる図書館』『走れ！移動図書館』の刊行と2014年の図書館界」『甲南国文』v.62、2015.3、pp.1-14
- 7)猪谷千香、鎌倉幸子（討議）「新しい公共の場」 pp.20-28、「特集 図書館の未来」『現代思想』vol.46、no.18、2018.12、pp.20-28
- 8) (<https://www.nhk.or.jp/docudocu/program/210/1199216/index.html>)
- 9) (<http://www4.nhk.or.jp/tsubo/>)
- 10) (<https://www6.nhk.or.jp/special/detail/index.html?aid=20181013>)

11) ドラマ公式『リピート～運命を変える 10 か月』 (<http://www.ytv.co.jp/repeat>)

乾くるみ『リピート』文藝春秋、2004→文春文庫、2007

上記の、乾くるみ『リピート』が原作とされるが、登場人物の設定は異なっている。ヒロインの職業は、原作では、図書館勤務ではない。

12) 日本テレビ『高嶺の花』 (<https://www.ntv.co.jp/takanenohana/>)

3. 2018年の図書館小説

2018年、現実面での図書館をめぐるさまざまな事象が、フィクションにはどのように反映されているのか。今回は、小説の中で図書館と関連のあるストーリーをふくむ作品を取りあげて、検討した。

3-1. 徳永圭『カーネーション』1)

●ストーリーの設定

冒頭の「序章」で、自分の娘に手を上げてしまうシーンが描かれ、以降、第1章から、第3章、第5章、第7章、第9章、第11章の奇数章が「諒子」というタイトルで、メインキャラクターの一人である「皆川諒子」が、図書館に勤めている時期のストーリーになっている。

第2章から、第4章、第6章、第8章、第10章の偶数章は、「美咲」というタイトルで、巻末の「終章」で、諒子の娘であることが明かされる「大久保美咲」が、メインのストーリーである。

したがって、図書館に係る描写は、「諒子」の章に多く見られる。「美咲」の章では、奇数章で「諒子」とされる人物が、「色白で柔和な顔立ちの女性」「年は五十歳くらい」である「店長の長山さん」(p.86)、美咲の勤務する呉服店の「雇われ店長」(p.140)として登場する。この人物は、先の「皆川諒子」が「通り名」として「長山秀子」を使っているという設定で、「育児書のたぐいは、図書館に勤めていたころは不得手だったのに」(p.266)、「十三年——。その年月を経る前には思いも寄らなかった場所に、今、自分はいる」(p.267)、などと、過去を回想している場面もある。奇数章で「諒子」とされるこの人物は、図書館から転職して、呉服店に勤め、「店主が高齢になったため店を任された」(p.140)。オーナーに「店では通り名を使う」(p.274)ことをすすめられ、「長山秀子」と称しているため、終章まで、美咲は、母娘であるという、ふたりの関係性には、気づかない。

本書は「書下ろし」であることが、巻末に示されており、単行書の刊行は、2018年3月である。

ストーリーの背景となる年代については、「第7章 諒子」に「WBAの新・世界王者、亀田興毅の話。夏の全国高校野球」で「『今年は“ハンカチ王子”だとかって、めちゃくちゃ盛り上がってるでしょう?』」(p.188)という記述がある。この事象は現実には2006年のことであり、奇数章「諒子」の章のストーリー展開は、2006年に起きていることが示唆されている。偶数章「美咲」の章は、そこから十年あまりが経過していることから、刊行

年次に近い、2010年代後半のことと考えられる。

「第1章 諒子」で、同じ図書館に勤めている「三つ下の後輩」(p.17)として登場する「孝太郎」は、「第11章 諒子」の中で、領収書をもらう際に、『またのお越しをお待ちしております、長山様』(p.263)と言われている。はっきりとは書かれていないが、諒子は、「長山孝太郎」と再婚して、図書館から呉服店に転職、オーナーのすすめで、職場では「通り名」である「長山秀子」と称していた、と思われる。2)

●皆川諒子=長山秀子の経歴

諒子は、「もう十五年も前——短大を出て契約職員として働き始めた大学図書館は日当たりが悪く、黴臭かった。そこは結婚を機に二年足らずで退職してしまったが、のちに公務員試験を受けて配属されたこの職場は明るく、開放感があつて、勤める身としてもありがたかった」。「三十代半ばを過ぎ、落ち着いた環境で働ける喜びがいつそう身に沁みる。とくに禁帯出本や郷土資料を中心にした二階は穏やかな時間が流れているようで、ひそかに気に入っている」(p.10)と「いぶき市立図書館」(p.9)に勤務している。

諒子は、「序章」で描かれている、娘に手を上げてしまったことが原因で、「産後三月で娘と引き離され」(p.20)、「実家での数カ月の休養後、『市職員の採用試験を受けようと思う』と切り出した」(p.59)。「うちの市なら、二十九歳まで受けられる」から「司書資格を活かしたい、という諒子の希望は運良く聞き入れられた。以前は正職員ではなかったものの、図書館での実務経験があつたことも幸いした」。「希望どおり市立図書館に配属されたあとは、数年ぶりの仕事を思い出しながら慌ただしく過ごした。新しい環境にうまく馴染めるか、不安がないではなかったが、忙しくしていれば深い悲しみに陥らずにすんだ」(p.60)。

図書館に勤めた経緯については、「地元の短大に進んだのも、司書の職を得たのも自分の意思だった」(p.54)ということであり、諒子が同僚の職員である孝太郎に『採用試験を受けたの、離婚後だったの。結婚してたのだから二年足らずだし』(p.192)と語っている。

偶数章の「美咲」の章では、同じ人物が「長山秀子」と称しており、呉服店で、着付けについて、美咲に『私だって転職組だから、最初は手間取ってた』が『前の職場にいたとき、思うところがあつて。着付け自体は若い頃に覚えていたんだけど、もう一度基礎から習い直してみようと思って、一念発起したのよね』(p.139)と話しており、「拾ってくれた店主が高齢になったため店を任された」(p.140)ということである。

終章では、二人の関係が明らかになり、母の日にカーネーションの花を手渡した美咲に「皆川諒子=長山秀子」が『カーネーションの聖母』について説明する中で、「昔図書館で司書をしていたとき、利用者に訊かれて調べた」(p.277)と言うと(のちに取り上げる、レファレンス事例①)、美咲は、『司書さんというのもびっくりしました』(p.278)と話している。

これらのストーリーから、皆川諒子=長山秀子の略歴について、まとめると、以下のようになる。

1970年ごろ 誕生

1990 年ごろ 短大卒 区職員として大学図書館に勤務
1992 年ごろ 結婚 退職
1993 年ごろ 離婚
1994 年ごろ 公務員試験受験 市立図書館に配属
2006 年 「奇数章」の「諒子」で描かれるストーリー
(この時点で離婚から「十三年」(p.20))
その後、再婚 呉服店に転職
2018 年ごろ 「偶数章」の「美咲」で描かれるストーリー

●図書館の状況

諒子が勤務する「いぶき市立図書館は、滋賀県いぶき市の中心地、いぶき公園に併設する形で建つ」。「市役所や他の公共施設からは離れているが、緑に囲まれていて居心地がいい、と評判は上々だ」(p.9)という。「とくに禁帯出本や郷土資料を中心とした二階は穏やかな時間が流れている」「一階よりも人が少なく、空間に余裕がある」(p.10)。一階は、「貸出・返却カウンターに列ができ」「午前十時半過ぎ。開館から一時間ほどしか経っていないにもかかわらず、閲覧用の机は諒子の視界に入るすべての席が埋まっていた。今年も例年と同様、学校が夏休みに入ったとたんに利用者が増えているのだ」(p.12)。「午後七時の閉館時間が近づき、スピーカーからメロディが聞こえてきた」(p.22)というように、開館時間は、午前 9 時すぎから 19 時までとなっている。また、「月曜日」は「休館日」(p.179)である。

「第 2 章 美咲」では、「大久保美咲」が、自分の娘の杏とともに、図書館を訪れる場面がある。「美咲」の章なので、時代は、作品発表時に近い、2010 年代後半ということになる。美咲は図書館には、「何度か来たことはあったが、いぶき市駅でバスを乗り継ぐというアクセスの悪さから足が遠のいていた」。それでも「図書館に着きさえすれば、涼めると思ったのに。——公共施設だもの、涼しいはずよ。電話口で聞いた義母の言葉を思い出し、美咲はハンカチを元に戻しながら小さく舌打ちした」。「図書館なら涼しくて快適だなんて、あり得るのだろうか。義母の感覚は古いんじゃないか。そう疑いを向けつつも、久しぶりに行ってみようか、と重い腰を上げる気になった」が、「炎天下を歩かなくていいだけ、家のがマシじゃないの。義母の思いつきを信じた自分を、美咲は恨めしく思った」(pp.26-27)とあるように、公共施設での空調について、利用する側が不満に感じている様子が描かれている。

空調に関しては、この時点から 10 年あまり前の状況が描かれている「第 1 章 諒子」でも、図書館職員の孝太郎が諒子に「『節電が始まってからこっち、涼み目当ての人は減ってますけどね。でも、さすがにこれはちょっと……。利用者にも熱中症が出かねないんじゃないですか』と発言しており、「ここ数日、梅雨が長引いたぶんを取り戻すかのような日差しが厳しい。とくにフロアの南側は室温が上がりがちで、暑くて閲覧どころじゃないと昨日クレームが入ったばかりだった」(p.18)というシーンがある。

●図書館の職員

諒子以外の図書館職員について、詳細には書かれていないが、このあとのストーリーで、諒子と行動を共にする場面がある「孝太郎」は、「三つ下の後輩」で、「司書資格を持ち、採用以来このいぶき市立図書館に勤めている諒子と違い、彼は二年前にここに異動してきた。同じ市職員でも」「彼は市民課から商工観光課を経て図書館配属となり、今は館内展示やイベント企画をおもに担っている」(p.17)。「彼と、選書や職員統括をする諒子とは仕事が違いうえ、諒子は口数が多い方ではない。同年代とはいえ、気安く業務外の話ができるほど打ち解けられてはいないと思う」(p.18)と紹介されている。

他には、「非常勤の橋本」という人物がおり、「五十手前の彼女は、非常勤職員の中でも一番の古株だ。長年チームリーダーを務めてくれている」(p.111)。後半のストーリーでは、諒子が自分の娘と重ね合わせて、会話を交わすようになる中学生の「梶ひかり」のために、諒子が弁当を作ってくることを提案しており、「すべて察したうえで、橋本は半ば強引に仕向けてくれたのだろう」。「橋本の観察眼に舌を巻く裏で、パートさんたちが噂していた、という孝太郎の言葉を思い出す。職員統括という立場として、もっとしっかりしなければと身が引き締まる思いがしたが、橋本のさっぱりした言葉に心強さをもらえた」(p.115)と、諒子は、感じている。

●諒子が離別した娘と同年代の利用者の梶ひかりへの対応

諒子は、離婚した後、会う機会のない娘と同年代の「梶ひかり」が、夏休みに入って、朝から来館して、座席の利用をめぐり、中年男性から怒鳴られたりすることが気になっていた。空腹である様子に、饅頭をわたしたり、パンを買ってきたりするうち、両親が離婚したあと父親が再婚し、新しい家族関係になじめず、図書館に来ていた梶ひかりに、「非常勤の橋本」の口添えもあって、諒子は弁当を作ってきていっしょに食べるようになる。そんなある日、夜の図書館の通用口に梶ひかりが座っていた。家に帰りたくないという、梶ひかりをなだめようとするが、結局、諒子の前から走り去ってしまう。気になった諒子は、同僚の孝太郎に電話で相談する。図書館にやって来て、『利用者情報、ありましたよね』孝太郎は机に手を突いたまま、端末を立ち上げていた。『目的外使用だから、本当はだめですけど……』(p.164)と言いながら、住所を調べる。諒子は、梶ひかりの父親に電話し、実の母親の勤め先を尋ねるが教えられないと言われる。母親が長野の旅館で働いていることをきいていた諒子は、梶ひかりが長野まで会いに行ったのではないかと考え、図書館で資料を調べて、行く先を推理して(のちに取り上げる、レファレンス事例④)、孝太郎とともに、レンタカーで長野へ向かう。「第8章 美咲」では、この時のことについて、美咲に『もう十年以上前にも、私、こうやって女の子を捜したことがあったのよ』(p.222)『当時はスマートフォンもないし、インターネットの情報も……ね。』(p.223)と話している。

「第10章 美咲」で、この人物は、美咲が、娘の杏を預ける幼稚園の教諭の「梶」であることが示唆されており、美容師になりたいと思っていたが、中学の時に父が再婚し、新しい母も、父も嫌だったこと、妹ができて世話しているうちに考えが変わり専門学校に入

り直したこと、などを美咲に話している (pp.252-253)。

●レファレンスサービス

諒子が、図書館に勤務していたという 2006 年当時の設定で、レファレンスサービスに対応している場面がいくつかある。

○レファレンス事例① レオナルド・ダヴィンチの初期作品 pp.8-12

「レオナルド・ダ・ヴィンチの初期作品について知りたい、という利用者」(p.8) に対応する諒子は、「72 という数字が反射的に浮かんだ」「書架を埋めた蔵書は、日本十進分類法に基づいて並べられている」「よく訊かれるものは上三桁まで覚えているけれど、他の分野についても上二桁までは頭に入っている」(p.8) という思考の流れで、該当の資料の納められている書架で、『世界美術大全集 西洋編』の総索引：別巻、を提示し、『何かお探しの作品があるんですか』と尋ねるが、絵の名前は分らない、展覧会の図録で見たことがあったが、「最近になって、当時の印象を思い出し、調べてみたくなった」と言われ、全集をみせると、「何枚か眺めたところで『これだ』『男性が探していた絵は、『カーネーションの聖母』と名付けられた作品だった』というやりとりがある。諒子は、男性利用者から『いや、助かったよ。わからないままというのは、どうにも気持ち悪くて』『題名も覚えてないから、あきらめていたんだけどね。頼んでよかったよ』(p.11) と言われ、「この仕事をしていて胸があたたかくなるのは、いつもこういう場面だった。必要な情報を見つけたとき。利用者の嬉しそうな顔を見るとき。ひとつひとつは小さいが、この達成感がなければまた図書館で働こうとは思わなかったかもしれない」(p.12) と感じる。

諒子は、のちに、「先週レファレンスを受けたときから気になっていた美術書」で、『カーネーションの聖母』について記載されていた本を「普段ならそれきり忘れてしまうのだが、今日、返却されて排架待ちの棚にあるのを見かけて個人的に借りてきた」(p.55) という行動をとる。

○レファレンス事例② ミンミンゼミ pp.120-121

諒子は、「ミンミンゼミは暑さに弱い、という説を、以前レファレンス業務中に見かけたのを思い出した」。「夏休み中のある日、小学生の男の子がレファレンスコーナーにやってきて、どんとカウンターに虫かごを置いたのだ。——この蟬、さっき捕まえたんですけどなんていう蟬ですか？二階フロアに鳴き声が響き渡り、虫嫌いの職員は卒倒し、あのときは大変だった。諒子もおっかなびっくり、昆虫図鑑と首つびきで種類を調べたのだった」(pp.120-121) という体験をしていた。

○レファレンス事例③ 利用者の中学生にヘアカタログを紹介 p.123

昼食をともにしながら会話をするうち、髪型に関心を示し『ヘアカタログ見て、アレンジできるとことはして……』と言った中学生の梶ひかりに『そういえば、うちの図書館にもいろいろ置いてるよ。ヘアカタログ。最新版も入ってるんじゃないかな。これが読みたいっていうのがもしあれば、リクエストしてくれてもいいし』(p.123) と、関心がありそうな資料の存在を提示し、図書のリクエストができることを紹介する。

○レファレンス事例④ 諒子が、夜の図書館から走り去った梶ひかりを追いかける場面で、行き先のヒントを探す pp.179-185

「図書館に戻ると、諒子は真っ先に 290 の棚へ向かった。『地理・地誌・紀行』に分類されているのは、旅行ガイドのたぐいで、梶ひかりの母親が働いていると思われる、長野の温泉地に関連がありそうなものを探す。また、「日本全国の最新版の電話帳」「タウンページ」で「温泉」をひき、諒子は孝太郎に『電話帳は NTT が作っているから、調べものには重宝するのよね。情報として信頼性が高い、というのかな。とくに職業別のタウンページは広告にもなるものだから、観光スポットやお店側は積極的に電話番号を載せてるの』（pp.179-180）と話している。

さらに、梶ひかりが「おばあちゃんちで目に効く水をもたらした」という話をしていたことを思い出したのをきっかけに『神社仏閣のご霊水とかかも』『水って思い込んでましたけど、実は温泉だったってことはないですか？』『諒子は新たに蔵書検索をかける。温泉に特化した本を探し、開架や書庫から集めて』きて、『外湯めぐり』に「目洗いの湯：眼病」とあるのをみつけ『これじゃない』と言うと、孝太郎に『皆川さんの根性と検索能力の賜物ですよ』（pp.182-185）と言われる。

これは、利用者から質問を受けて対応したわけではないが、自らの行動選択に必要な情報を、図書館にある情報源を使って調べているケースである。

●図書館でのトラブル

○トラブル事例① 座席の利用をめぐる言いあらい pp.65-67

諒子は「交代で昼休憩を終え、混み合っているカウンターを手伝っていると、男性の大声がした。『迷惑なんだよ！』フロアに余韻が響いている。諒子と同じく、行き交っていた利用客も動きを止めている。『席が足りていないことくらい、見りゃわかるだろ。寝るだけなら余所に行けよ、余所に！』胸騒ぎは的中した。閲覧席の脇で、本を抱えた中年男性がものすごい剣幕で怒鳴っている」（p.65）という場面に出くわす。

行政職員である、孝太郎が間に入ると、「彼は調整ごとに長年携わっているだけあり、こういう場を治めるのがうまい」ので、男性利用者は『最後は怒ったままでてきましたよ』『僕、あのおっさんのほうが気に入らないです』『毎日来て寝こけている人なんか、他にもいる』『自習室には一日居座ってる子ども多いじゃないですか。自習席ではよくて閲覧席はだめってのも、理屈が通らないっていうか。たまには本も読んでみたいだし』『あのおっさん、そういう人らには注意しないんですよ。口答えできない女子中学生だから怒鳴ったんですよ。そういうの、なんか嫌なんですよね。弱いものいじめみたいで』（pp.65-68）と、孝太郎は、諒子に話している。

「服をいつ洗ったのかもわからない、浮浪者まがいの利用者」に『臭う』と苦情が出ることもあり、さりとて追い出すこともできず、対応に苦慮している。どこの公立図書館にもおそらくいるだろう」（p.68）と、諒子は、感じる。

○トラブル事例② 子ども連れの利用者が周囲の反応を気にかける pp.31-33

「第2章 美咲」の中では、図書館を利用している子どものトラブルが描かれている。「美咲はなんとか杏を立ち上がらせ男の子に謝らせようとした。だが杏はさらに機嫌を損ねたようで、泣き声をいっそう張り上げた。視界の端に、さっき雑誌棚の前ですれ違った中年女性が映り込む。こちらを一瞥し、不快そうにしかめられた横顔に気づいて心臓が跳ねた。静かなところに連れてくるのは、やっぱり無謀だったのだ」(p.33) というように、図書館を利用するがわにも、他の利用者との関係性に悩んでいる場面がある。

他に「第1章 諒子」の中で、子どもが育児雑誌を破ってしまったという利用者に諒子が対応する場面がある。「『あの、弁償は……』」と不安そうに申し出る母親に、諒子は「『大丈夫ですよ』」(p.13) と対応している。

奇数章の「諒子」では、2006年の時点で、皆川諒子は「いぶき市立図書館」に、司書として勤務しており、図書館の職員では、司書資格を持った専門職員以外に、行政職員として、他の部署から図書館に異動してきた「孝太郎」や、「非常勤の橋本」の存在も描かれている。レファレンスサービスや利用者間のトラブル、職員が個人的な関心をよせる利用者の存在、などもストーリーの材料となっている。

そこから、10年余り経過した、偶数章の「美咲」でも、公共施設で空調がきいていない、子どもがトラブルを起こす、などの図書館に関連するストーリーが描かれている。諒子は、再婚し、呉服店の雇われ店長に転職している。安定した職業である、図書館司書を辞めた契機については、本文中ではあきらかにされていないが、自分の娘と同年代の利用者を心配するあまり長野まで追いかけて行ったこと、同じ職場の「(長山) 孝太郎」と再婚することになった状況、などが背景にあったのか、と思われる。

注)

1) 徳永圭『カーネーション』KADOKAWA、2018.3

本書の奥付に「1982年生まれ。京都大学総合人間学部卒業。2011年『をとめ模様、スパイ日和』で第12回ボイルドエッグズ新人賞を受賞しデビュー。二作目の長編『片桐酒店の副業』は多くの書店員の応援を受け話題となる」と、記されている。

巻末には「謝辞」として「執筆にあたり、司書業務について愛知県安城市アンフォーレ課・司書の市川祐子さんにお話を伺いました。この場を借りて厚く御礼申し上げます」と記載されている。

巻末に「本書は書下ろしです」と表示されている。

2) 「第6章 美咲」では、長山には「結婚して十年だという年下のパートナー」(p.147) がいることがあかさされており、「『夫のぶんを作るついで』」(p.156) に長山は手作りのお弁当をもってきている。また、「第7章 諒子」では、孝太郎が諒子に、「『今コーヒーに凝ってる』」(p.187) と話しているが、「第8章 美咲」では「『うちの夫、コーヒーが好きでよく飲む』」(p.215) と、長山が美咲に言っているシーンがある。

3-2. 『司書のお仕事 お探しの本は何ですか?』 1)

●ストーリーの設定

冒頭に、本書の執筆に至った動機が記されている。小説・評論の著作があり、大学で司書課程の授業も担当している著者が、司書の資格を取りたいという学生と面談して、「司書の方が図書館でどういう仕事をしているか、イメージができますか?」と尋ねても正確に答えられない。図書館で働いたことがないので、当然ともいえるが、司書課程の教科書や図書館員向けに書かれた本は、「内容のほとんどが、非常に専門的」(p.1)で、司書の仕事の「基本的なことが書かれている本がほとんどない」(p.2)。「図書館を舞台にした小説やマンガ」でも「司書の方の具体的な仕事内容を描いたものはあまりありません」。ということで、高校生、司書課程で勉強したり、図書館に就職しようとしている人に対して、「司書の方がふだんされているお仕事の内容を、ストーリー形式でわかりやすく読めるように作ったもの」(p.2)であり、「図書館司書は、地域や学校にいる人たちが学んだり、より正確な情報を探したりするために欠かせないもの」「非常に奥が深い専門職で、働けば働くほど次々に新しいことに取り組んでいかななくてはいけない、とてもやりがいのある仕事」(p.3)だと記されている。なお、図書館特有の用語については、解説がつけられている。

この『司書のお仕事 おさがしの本は何ですか?』について、先に紹介した、図書館を特集した雑誌記事の一つでは、「特に公立図書館の今の日常が活写されているうえに、よく工夫されていて読みやすい」。「そこで行われているのは、紙の本のハンドリング、選書、児童サービス、レファレンス、各種企画の準備、である」と紹介されている。2)

「主要人物紹介」(p.6)では、「稲峰双葉」「公務員試験で採用」「一般書担当」「明るく元気で、ちょっとしたことでめげない性格。子どもの頃から探し物が得意」。「山下麻美」「児童書担当」「年齢は双葉より三つ上だが、司書としては一年先輩」「人見知りで口べたなだけで根はやさしい」「大学院まで英文学を専攻しており、司書という仕事に強い使命感を持っている。レファレンス調査の能力は高く、その実力には館長や智香も太鼓判を捺している。趣味は同人誌作成と、全国各地の図書館めぐり」。「花崎智香」「双葉と麻美の上司で、図書館の主任司書。文芸書担当」。「下諏訪淳也」「味岡市立図書館長。物腰がやわらかく、いつも飄々としている。日本図書館協会の認定司書」などと紹介されている。

●コラム

先に記したように、本書は、小説の形をとりながら「司書のお仕事」について具体的に伝えようとの意図で執筆されるに至ったものである。したがって、ストーリーをわかりやすくするため、図書館に特有の用語や概念については、本文とは別に解説のページで説明されている。それは2種類あり、ひとつは、「目次(pp.4-5)」に、「コラム」として掲載ページが記載されていて、各章の末尾に掲載されているものである。内容は、次のとおり。

- 第1章 「NDC分類」pp.104-107 「図書館員と司書」p.108 「司書のお仕事」pp.109-110
- 第2章 「YA(ヤングアダルト)書籍」pp.171-172 「図書館のイベント企画」pp.172-174
- 第3章 「レファレンス・サービス」pp.249-250 「学校図書館と公共図書館」pp.251-253

もうひとつは、目次には記載がなく、本文の上または下の部分に、本文とは別の囲みスペースの中に、記載されているものであり、次のとおり。

第1章 「本の装備」 pp.22-23 「件名」 p.25 「大学図書館と公共図書館」 p.68

第2章 「選書会議」 p.113 「閉架書庫」 p.146

第3章 「キーワード検索の方法」 p.179 「契約データベース」 p.186 「公共図書館の司書と学校教員」 p.203 「学校図書館の図書廃棄基準」 p.213

「おわりに」として、巻末には、「監修」を担当した「小曾川真貴」（表紙カバーには、「犬山市立図書館司書・日本図書館協会認定司書」との記載がある）のコメントがつけられている（pp.254-255）。

● 司書資格と図書館への就職

稲嶺双葉は、「『大学で司書の資格を取っていたから、地元の公務員試験を受けたら、図書館の配属になった』（p.8）。「司書は平日に交代で休みを取る。同級生とはほとんど休日が合わないので、せっかく地元に戻ってきたのに、近頃はぜんぜん会えなくなってしまった」（p.183）という。

「就職してからはじめて連休を取ることができたのは、七月半ば」で、化粧品メーカーに就職した学生時代の同級生に、「『良かったじゃない、楽そうなところに就職できて。図書館の司書って、カウンターに座って本の貸出をしたり、返却された本を棚に戻したりしてればいいんでしょ？』』と言われる。反論したいと思うが、「図書館の司書には、利用者には見えない館内で、山のように仕事がある」し、「図書館司書の仕事を一言で説明するのは難しい」（pp.8-9）と、愛想笑いをする。

就職するまでは、カウンターの仕事ができると思っていたが、実際は空いた時間に、カウンターに出ると、「図書館運営会社から派遣されてきている司書さんたちの邪魔にならないように、お手伝いをしているという程度のもの」で、「入職してからこの四ヵ月、カウンターに出ることができたのは数えられるほどしかない」（p.18）。本を扱う専門の仕事以外に、広報誌の原稿執筆やイベントの企画書作成などもしている。

本書の中で、図書館の業務について、現代的な業務にもふれたコメントに、双葉が市の職員として採用され、図書館に配属された日の館長の挨拶がある。「図書館司書の仕事は、たしかに本を扱うことです。本についての知識をたくさん持って、選書をしたり、利用者に紹介したりしないといけません。けれども現代の司書にとってそれ以上に大事なのは、司書は専門的な情報検索をすることができるプロだということです。利用者がなにかわからないことがあるとき、困っていることがあるとき、インターネットの検索サイトで検索をするだけではなかなか情報が出てきません。間違いだらけの情報や、違法に集められた情報、思い込みで書かれた嘘の情報が、検索の上位にきてしまうことも多くあります。だから司書は、図書館で契約しているデータベースや、紙で印刷されている辞書を使って、より正確な情報を、できるだけ短い時間で利用者に提供する。あるいは、利用者と一緒に検索をする。それによって、市民が困っている問題を解決することができる。こうした手

助けをすることが、現代の司書に求められている仕事だと思います」(pp.131-132)と述べられており、インターネットが社会に定着した中でも、図書館が提供する「専門的な情報検索」「課題解決支援サービス」の重要性が強調されている。

●司書をめざすきっかけ

稲嶺双葉は、高校生のころ、女子サッカー部で、サッカーがすべてのような生活だった。読書感想文の課題がだされ、「大学二年生だったお姉ちゃんに」言われて図書館へ行ってみる。そこは、「味岡市立図書館の分館」で「ワンフロアだけの小さな部屋」に職員が一人だけで、「一般書よりは児童書が多く所蔵されていて、全体の三分の一ほど」を占めていた。感想文を書くのであれば小説が読みやすいはずと思い、書架を探すが、一時間ほどで途方に暮れてしまう。「貸出カウンターの隣にある『総合案内』というパネルが目にとまった。そこには、——おさがしの本はなんですか？ 読みたい本が見つからない。調べたいことがあるのにどの本を見たらいいかわからない。そんな時はご相談ください」(p.164)とあり、そこにすわっていた女性に話しかける。

「おっとりした口調で話す」「白いブラウスに黒いハイウエストのホルセットタイプのスカート、胸元には黒いリボン」の女性職員に、読書感想文の課題で、何を読めばいいか、ときくと、一緒に探しましょうと言って、「YA(ヤングアダルト)コーナー」へ行く。中学生や高校生向けの本のあるコーナーで、「司書の女性にいろいろなことを訊かれた。好きな教科。部活でなにをしているのか。趣味。面白かったテレビ番組。質問に答えるたび、女性は手にしているノートにメモを取っていく」。女子サッカー部を題材にした本は置いていないが『『絵を描くのが好きならこれは面白いんじゃないかしら』』(p.166)と、ある本をすすめてくれた。その本は、「家族とはなんなのかという題材をテーマにしていて、「司書の女性は、私が興味を持ちそうな題材の本だというだけではなく、感想文を書きやすい内容のものを選んでいた」のだ。夏休みの終わりに、本を返し、カウンターにいた女性にお礼を言うと、『『良かったわ。この本を好きになってくれて』』「本を読み切ったことを褒められたわけでも、書いた感想文を賞賛されたわけでもなかった。けれどもその一言が、私の心にはなによりも響いた。そしてこの瞬間、司書という仕事をしている女性を、キラキラしていて素敵なお人だと、心から思った。東京にある女子大に入学して児童文学を勉強したのも、そこで司書課程の授業に出たのも。すべてはこの一冊の本との出会いが始まりだった」(pp.163-167)ということが、きっかけとなって、司書をめざしたことが紹介されている。

そのときの女性職員が、双葉が勤務することになった味岡市立図書館の主任司書・花崎智香であり、「その表情に、私は見覚えがあった。高校生のとき——私が一般の利用者として図書館に来たとき、当時はまだ新人司書だった智香さんが見せたものだ」(p.21)と、双葉は感じた。

●選書会議

ストーリーの舞台となっている味岡市立図書館では、「毎週火曜日の夕方」「四人が、一

人七十点くらいずつの推薦図書リストを選び出し、「リストに挙がっている本が図書館で受け入れるのにふさわしいかどうか、その本を購入することが本当に必要なかを議論して決めていく」。「一週間に購入できる本は、だいたい一〇〇冊から一五〇冊まで。だから書籍の絞り込みのために、選書会議の議論はどうしても長時間に及ぶことが多い」(p.112)と、司書資格を持つ職員である、館長、主任司書の智香、麻美、双葉、の四人で選書会議を行うことが示されている。

BL(ボーイズラブ)小説について、館長は受け入れに反対し、中高生の目に触れるのはまずい、と主張する。麻美は、閉架図書にして、請求があったらカウンターで年齢確認すればよい、とし、『『予約点数や貸出点数が増えれば、図書館への評価も高くなりますし…』』と言うが、館長は、学校のPTA、教育委員会、市議会議員も購入図書をチェックしているし、予算を減らされても困る、と述べて、BL購入は保留となる。

智香は、『『図書館としては、特定の本だけを入れないというわけにもいかないから。『図書館の自由に関する宣言』にしたがえば、本の表現や内容の思想性を根拠に本を選別することはできないから、BLも受け入れないといけないわ』』と発言し、双葉は『『図書館は『良い本』や『読むべき』本を置くべきところではなく、『できる限りいろいろな種類の本を置くところ』ですもんね』』とこたえて、「苦情が保護者からあり、味岡市内の中学校や高校の図書室では、ライトノベルの受け入れを全面的に停止したらしい。図書を受け入れる司書教諭の先生が、購入する図書の内容を追い切れないというのが理由だという。ここ数週間、味岡市立図書館でそうした本のリクエストが増えているのは、どうやらそのことが原因のようだった」(pp.116-117)と、中学生から聞いた話を思い出す。

司書教諭については、学校図書館が舞台となる、ストーリーの後半でも扱われているが、このページで「司書教諭」について、本文中の()内で、「学校図書館を運営するための資格。教員免許を持っている人(または取得見込みの人)が、大学で指定された五つの授業を追加で受講すると取得できる」(p.117)と説明されている。

(*「学校図書館」「司書教諭」については、本章の後半で取り上げる)

公共図書館での選書については、「図書館の選書はとても難しい」とされ、コンピュータシステム、法律の知識、市役所への対応、などは「図書館員の人たちが今まで代々積み重ねてきたマニュアルがあるので、調べればたいいのことには対応ができる」が、「選書だけは、なかなかうまくいかない」。「毎週一〇〇〇点以上もの膨大な量が出版される本の中から、予算の規模、図書館の書庫面積、利用者のリクエストやニーズ、周辺にある図書館の所蔵状況、自分たちが所蔵したい本の特徴、受け入れた本が市民にどう受け取られるかを考えて、購入する本の取捨選択していくことになる」(p.120)とされている。

図書館運営会社から送られてくる新刊情報の冊子に書かれたタイトルや紹介文も参考にしますが、自分の足で、本についての情報を集めなくてはならず、「自分の図書館が持っている数十万冊という本の所蔵をひととおり把握して、いつも書き手についての情報を集めてアンテナを張っておかないといけない」(p.121)と述べられているが、『『司書の選書にも、

ちょっとくらいは私情が挟まることもあるでしょ？ このお仕事にも、そういう楽しみくらいはないとね。私だって……』(p.122) と、智香が双葉に言っている場面もある。

利用者の希望する図書のリクエストについては、『リクエスト BOX』として、「カウンターの隣にある木製のポスト」があり「利用者が図書館に受け入れてほしい本の書名を書いた紙を投函するためのもの」で「火曜日の選書会議で受け入れるかどうかを決めて、掲示板にその結果を貼り出す」(p.124) と紹介される。3)

●図書館の職員と図書館運営会社

「八時四十五分。図書館運営会社から派遣されている司書さんたちが出勤してくる」。「味岡市立図書館には、智香さん、麻美さん、私と、専任の司書が三人しかいない」4)ので、「一部の仕事を図書館運営会社に業務委託している。こうした司書さんたちの出勤管理とミーティングの進行は、私の仕事」である。「貸出や本の出納、カウンター業務を派遣の司書さんたちに任せて、私は館内の事務室で仕事をすることになる」(p.17)。そこで「専任の司書」が行う具体的な業務内容としては、午前：インターネット経由で新規登録者の申請をしてきた利用者の登録と利用カード作り、遠隔地からの申し込みのあった資料の複写、他館との資料のやりとり、大学図書館や専門図書館の利用を希望する利用者の紹介状作成、市役所に送る書類の作成、電話とメールの対応、広報誌の原稿作成、イベントの企画書作成、午後：図書の受け入れ、会議や作業、などがあげられ、それに、地下書庫で見つかった本の目録作りが加えられることになる。双葉は、「就職するまでは、もう少しくらいはカウンターの仕事ができると思っていた」(pp.17-18) が、実際は、カウンター以外での業務が多いことが示されている。

他の職員について、「『智香さんも、よく上の事務室で、たまにはカウンターにでたいー！って叫んでいる』」。「児童書が担当の麻美さんは、よく児童書のコーナーに出て子どもたちの相手をしている。館内で事故が起きたりしないかを見ていることはもちろん、絵本の読み聞かせや保護者の方への対応も仕事の一つだからだ。けれども、智香さんや私の場合、なかなかそうはいかない」(p.31) し、市役所に提出する書類を作成したり、市議会の文教委員会で行われる図書館関係の答弁書を書き、受け入れ作業の本が溜まっているのを処理したり、会議が長引いて残業することになったり、といったさまざまな業務に対応していることが紹介されている。

図書館に多様な雇用形態の職員が配置されている実態については、昨年とりあげた『図書館は、いつも静かに騒がしい』『みさと町立図書館分館』5)などの小説でもふれられているが、本書は、「司書の方がふだんされているお仕事の内容を、ストーリー形式でわかりやすく読めるように」(p.2) という執筆意図で書かれているため、公務員の専任職員とともに、現在、多くの図書館で、実務を担当している「図書館運営会社」とそこで働いている職員の業務内容についても、詳しく扱っている。

たとえば、図書館で受け入れる図書の扱いについても、「カウンター業務の委託をしている図書館運営会社は、出版社と書店のあいだに立って本の売買の仲介をする取次会社と、

専門書店とを兼ねてい」て、「味岡市立図書館に所蔵されている本のほとんどは、そこから購入することになる」。「こうした本は図書館向けのサービスとして、新館が搬入される時点で、すでに背表紙には本の分類が印字された図書館ラベル、裏表紙には味岡市立図書館のバーコードが貼られ、その上からブックカバーと呼ばれる透明なブックカバーで本全体が覆われている。だから、いくつかのチェックと本の情報についての処理を行って、あとは本の開き癖を作っておけば、ほとんどそのまま書架に排架することができる」(pp.21-22)と紹介されている。本の装備についても、「昔は」「図書館の内部でやっていた」が、「司書だけでは」「間に合わな」くて「ボランティア」や「大学の司書課程の学生に、研修という名目で無償でやってもらったりしていた」。けれど「作業がまったく追いつかない。だから、こうした図書館運営会社のサービスはとてめえありがたい」(pp.22-23)と述べられている。

職員の一人である「裕美は週に五日、八時半から十六時半までの八時間、図書館運営会社から派遣されてきている。カウンター業務と本の出納の業務が担当。歳が同じで、私が派遣の司書さんたちの担当をしていることもあって、入職してすぐの頃からよく話をするようになった」(p.30)。双葉が「『裕美にも、受け入れ業務を手伝ってもらえれば良かったんだけどね』」と言うと「『味岡とセンターは、カウンター業務しか契約していないですから』裕美は自分が登録している図書館運営会社のことを、いつもセンターと呼んでいる」。「『裕美は司書の勉強をしているんだから、他の仕事もできるでしょ?』」と言うと「『カウンター以外のお仕事をすると、たぶん、追加料金をいただくことになりますよ』」(pp.35-36)と返されるシーンがある。

●図書館の日常業務

○本の分類

図書館に入る本の分類について、「タイトルや目次をみるだけでなく、その本を書いた著者がどういう経歴の人で、今までどういう文章を書いている、さらに、その著者がかかわっているジャンルではどういう書き方がなされているのかを把握していなくてはいけない」。「分類は一見簡単そうに見えて、実は司書にとってとても奥深い仕事なのだ」。「ありとあらゆる分野の現在の状況や傾向、流行を、ひととおり頭に入れておかななくてはならないことになる。これが、図書館司書が専門職だと言われるゆえんの一つだ」(p.34)とされる。

中には「ときどき、運営会社が雇ったアルバイトがブックカバーやラベルを貼っていると」「おかしい状態のものが紛れ込んでいることがある」(p.24)。ある本について、「分類をつけたのは図書館運営会社の司書さん。搬入のときすでにこの分類のラベルが貼られていた」(p.28)が、双葉は、図書館運営会社のデータで問題ないと思った。先輩職員の麻美は、シリーズ名を指摘して、「シリーズものは、うちの図書館では同じ分類にしている」(pp.26-29)ことから、分類の修正を指示する。また、「古書店から買った本は図書館運営会社から買う本とは違って、装備が行われていない」(p.159)ので、自分たちで、ブックカバーをつけ、ラベル貼りをしなければならない、という。

○開館前の業務

図書館が開館する前の「新聞の受け入れ」については、「朝、図書館のポストには、館で所蔵しているすべての種類の新聞が、文字通り山のように積まれている」ので、「新聞用の閲覧台に挟んで固定し、入れ替わりに前日の新聞をファイリング」し、「郷土関係の重要なニュースについてはコピーを作って館内に掲示をする」。「公共図書館は、地域についての情報を地元住民に伝え、市民の知る権利を保障する場所としての役割を担っている」(p.15)。また、「返却ポストの確認」は、「閉館時間は午後九時なので、利用者がそれ以降の時間に本の返却をするときは、建物の外から返却できるポストに投函をする」ので、「通勤帰りの人がこのポストを利用する頻度が高いので、この冊数がとても多くなる」としている。さらに、「書架のチェック。ときどき、利用者が適当な棚に本を差し込んでしまうために、行方不明になる本が出てくるのだ。このチェックは前日の遅番に当たった司書が退勤前にもやっている。けれどもどうしても漏れが出てしまうので、早番の司書がもう一度確認をすることになっている」。「他の図書館では、この時間に館内の掃除をしているところもあるらしい。うちの場合は、午後九時の閉館のあとに清掃業者が入っている。そのぶん、遅番は午後十時まで鍵を閉めるのを待たなくてはいけなくはないけれど、朝は少しだけ余裕がある」(pp.16-17) という状況にある。

業務中には、本がぎっしり詰まった箱を抱えて階段を往復することもあり、司書は、力持ちさんになれる、という言い方もされることがある。(pp.20-21)「司書の仕事は、静と動だ。こうした地味な終わりのないデスクワークと、信じられないほど重い荷物を運ぶ作業とが、毎日のように淡々と繰り返される」(p.25) という。

また、「休日の図書館は、たくさんの人でにぎわっている。本についての相談はもちろん、中高生に向けて開放している自習室や、社会人向けの学習支援室の利用者も多いので、カウンターはいつもバタバタしている」(p.72) と紹介されている。

●レファレンスサービス

稲嶺双葉は、子どもの頃から探しものは得意で、コツは、順序をしっかりとたどることだと思っている。「大学の授業で、図書館司書にレファレンス・サービスという仕事があると知ったとき、私はそんなことを考えていた。利用者の情報検索の手伝いをする。より効率的に調べものができるように、索引やデータベースを作る。それはつまり、探しものをするときに順序をたどるために、あらかじめかしたら私は、レファレンス・サービスに向いているかもしれない。そう思った」(p.176) が、実際に勤務していく中で、勉強不足を思い知らされる。

主任司書の智香は「『レファレンスは、何年司書をやっていても、うまくいかないことはうまくいかないことはあるもの。どんなに司書が『調べもの、探しもの、お手伝いします』といっても、限られた時間の中では限界があるから、気にすることないわ』」(p.177) と言う。また、同じく先輩の麻美は、双葉に「『レファレンス相談への対応は、個人でやるものじゃないわ。司書それぞれに得意分野があるんだから、グループで考えないと』」『レファ

対応は司書の仕事の花形だから、うまくできるに超したことはないけれど。たった一人の利用者からの相談にだけ、かかりきりになるわけにもいかないでしょ。他の仕事や他の利用者からの相談はどんどん押し寄せてくるんだから、均等に処理していかないと』(pp.182-183)と述べている。

また、「こうした調査ができるかどうかは、司書としての能力がいちばん問われるところでもある」(p.72)、「地域についての情報は、その地域にある公共図書館で調べるしかない」(p.243)、などと、このサービスについて、ふれているところがある。

本文とは別に、各章の章末で図書館関係の用語について解説している「コラム」の「レファレンス・サービス」(pp.249-250)では、「司書にとってレファレンス・サービスはまさに『花形』！ 図書館に関する小説や漫画でも、取り上げられる頻度の高いサービス」で、『調べもの』のお手伝いなのですが、『謎解き』の要素もある」としている。さらに、『こちらですね』とカッコよく資料を差し出すのは、司書でないひとだけでなく、おそらく当の司書にとっても、憧れる『司書』の姿です」インターネットで手軽に検索できるようになった現代、レファレンスの質問も様変わり」しており、「いったいどんな質問が寄せられているのか」については、「レファレンス協同データベースや、福井県立図書館の覚え違いタイトル集などを覗いてみてください」と述べられている。

○レファレンス事例① 大佛次郎『パリ燃ゆ』 pp.79-82

カウンターで「七十代くらいの男性利用者」が「不機嫌そうに眉根を寄せてい」て、「取り付く島もない」という状況。図書館運営会社から派遣されている裕美から、『所蔵有、閲覧可になっている資料が、書架に見当たらないんですよ』と言われて、双葉は「たぶん、利用者の誰かが閲覧をしたあとに、まったく関係のない書架に戻ってしまったのだろう。あるいは、本が盗難に遭ったという可能性もある」(p.79)と考える。その本、大佛次郎『パリ燃ゆ』について、麻美は、近隣の図書館から取寄せられることや、地下鉄で七駅の県立図書館で閲覧可であることを伝えるが、利用者は、ここですぐに見たい、とゆずらない。この男性利用者は、双葉に、『彼はもともと、鎌倉女学校の教師だった。どうしても娯楽作家のイメージがあるが、本当に面白いのは小説ではなくルポルタージュの方なんだ』『私も高校教師だったから、妙に親近感があってね』と伝える。結局、再度、図書館資料の検索をした麻美が、『大佛次郎ノンフィクション全集』の第三巻と第四巻が『パリ燃ゆ』になっています。閉架書庫に入っていますから、すぐに出します」(p.91)と回答して、資料を提供した。検索結果一覧にでていたはずなのに、見落としていたのだった。

○レファレンス事例② 「フランシス・ボーウェン」について pp.183-194

図書館で、うまく対応できなかった先のケースがきっかけとなり、双葉は、調べもののやり方を教えてほしいと、同級生で味岡市立大学院生である、裕樹に依頼する。

裕樹は、「フランシス・ボーウェン」(p.186)について調べてほしいという相談があったらどうする、という例を出す。すでに、日本語のインターネットではいちおう調べてある、「レファレンス協同データベース」6)は、検索しても見つからない、「ジャパン・ナレッ

ジ」7)では、カタカナ・英語表記、ともにヒットしない、国内の主要人名辞典には載っていない、という想定で、あとは、県立図書館の OPAC で蔵書検索する、日外アソシエーツの『人物レファレンス事典』8)で調べる、国立国会図書館の NDL-OPAC をひく、国立情報学研究所の CiNii 9)で検索する、英語のスペルが分かるならインターネットで英語表記で調べる、などの手段があることが示される。

国立国会図書館が運用する「NDL-ONLINE」10)に英語表記で入力すると、「一八五〇年代から七〇年代にかけて、哲学に関する本を出版していた人物」(p.192)であることがわかり、著作が翻訳出版されているが、著者名が「ボーエン」となっているので、日本語検索で引っかからない。ウィキペディア英語版には項目ページがあり、「ハーバード大学で哲学や政治経済を教えた人物」「東京大学で哲学を教えていたフェロノサという人の師匠に当たる」ことが記載されている。この件について「ウィキペディアの内容には間違いや、意図的に事実と異なる情報が書き込まれることも多いので、この情報だけを信用することはできない」「それ以外にもいくつか紹介ページがあるから英語名で調べれば誰でも簡単に人物情報にたどりつけることになる」(p.193)と、解説されている。

裕樹は双葉に、「『インターネットで手に入る情報は、どうしても断片的なものだから。情報と情報とをつなぐための方法を考えないといけないし、本当に必要な調べものはまだ誰も調べたことがないものだったりする。ネットでは出てこないんだよ。そういう未知の領域があるからこそ、インターネットがどんなに発達しても司書や研究者の仕事はなくなるんじゃないし、むしろこれから司書の仕事が重要になってくるんじゃないかな』」(p.194)と、インターネットが普及した中での、図書館や司書の役割について話している。

こうした系統的な調べ方以外に、裕樹は「根性引き」という「『それっぽい本を端から順番に読んでいって、根性で探すこと』」(p.194)についても、あげている。

○レファレンス事例③ 城東学院高校が女子校化したときの反応 pp.177-180,pp.237-245

事務室にいた双葉が、カウンターからの電話で、1階に降りると、「四十代半ばくらいの温和そうな女性」の利用者と裕美が、「何冊もの新聞や分厚い本をテーブルの上に広げて積みあげていた」。「図書館から歩いて十分くらいのところにある進学校」「『城東学院高校が昭和二十六年に女子高化したときの反応について調べている』」(pp.177-178)とのことで、学校が正式に刊行した記録の本や、地元紙・全国紙の地方版を調べていた。双葉は、「蔵書検索システム OPAC の検索窓に」「関連しそうなキーワードを次々に入れて所蔵資料を検索して」ヒントになりそうな本をさがし、「県立図書館に所蔵されている本との統合検索で探せば、もう何冊か資料が手に入りそう」に思われた。雑誌に載せられた記事を検索できる「ざっさくぷらす」11)を図書館で契約しているので、同じようにキーワードを入れて探してみた。十五分くらい、データベースや本、雑誌と格闘したが、「城東学院女子高校が女子校になったときの記事や、そのことについて書かれた本はみつけれなかった」。

このときの対応について、先輩職員の麻美は双葉に、「『ちゃんと、利用対象の確認はした?』と、訊ねる」「『だって、『女子校化したときの反応』だけだといつたいなにを調べた

らいいかわからないでしょう？ もう少し具体的に、どういうことを知りたいのかたしかめないと』『つまり今回は、利用者がいったいなにを求めているのかを双葉がちゃんと掴めなかったということよ。それは、利用者の目線に立ってサービスができなかったということでもあるわ』(p.181)と述べている。双葉は、このあと、「できるだけ、相談に来た人がなにを考えているのか、なにを求めているのかを聞き出していく。それが、レファレンスの基本」(p.221)と、麻美に言われたことを、思い出して対応する。

他にも、蔵書印の解説(pp.46-51)、本に挟まれていた紙に書かれた与謝野晶子『みだれ髪』に収録された短歌のもつ意味(pp.54-58)、など、利用者からの質問に解答するものではないが、図書館職員が専門的知識や資料を参照して、調べるストーリーが展開されている。

●学校図書館と公共図書館

本書は、司書課程の授業も行っている大学教員が執筆し、監修とコラムを公共図書館職員(日本図書館協会認定司書)が担当しており、図書館に関する専門用語やストーリーの舞台となる「味岡市立図書館」に特有の事情について、説明されているが、学校図書館に関する記述については、やや、わかりづらいところもある。たとえば、本文中に「味岡市立の小中学校や県立高校とは、非常勤の司書教諭を味岡市立図書館で採用して派遣したり」(p.203)とあるが、司書教諭は「教諭をもって充てる」職であり、その採用を図書館が行うことは考えにくい。「非常勤の(学校図書館担当者として)、司書教諭(資格をもつ人材)を、(市立)図書館で採用して派遣する」といった意味か。

双葉が、中学生の時の同級生で、図書委員をしていた「木山理奈」は、城東学院女子高校で非常勤講師をしており、「大学で教職課程を履修しながら、司書教諭の講習も受けていた」ので、「城東女子では、国語の授業をする仕事とは別に図書館の運営も担当している」。「司書教諭は教員免許を取得するための科目に授業五つを追加すれば修了証書が発行される。だから、特に国語や社会の先生をめざす人がその証書を持っていることが多い」(pp.198-202)と説明されている。なお、司書教諭について、他のページでは、本文中の()内で、「学校図書館を運営するための資格。教員免許を持っている人(または取得見込みの人)が、大学で指定された五つの授業を追加で受講すると取得できる」(p.117)とされていた。12)

双葉は、理奈から「勤め先の城東女子の図書館とうちの図書館とで、連携事業を始められないか」(pp.202-203)と提案を受ける。城東女子学院の図書館は、コンピュータによる蔵書管理が導入されておらず、貸出も、カードで管理している。『定年退職された専任の国語の先生が、片手間に運営して』いて、「購入もその先生がやっていた」(pp.204-205)。蔵書数は一万二千冊くらいで、受け入れ図書は、1ヵ月に二十冊ほど、ラベル貼り・貸出カード作りは、図書委員の生徒がしている。理奈は、蔵書管理システムを市立図書館と共有できないか、と提案するが、主任司書の智香は、市立図書館では『図書館運営会社のデータを使っている』。『城東女子の図書館で同じ会社と契約するのは、予算的に厳しい』

が、小規模館でも導入可能なシステムとして、ブレインテック『情報館』13)を紹介し、「小規模の学校図書館や専門図書館向けに、蔵書管理システムを提供している」ので、「ここで契約して蔵書データを管理できるようになれば、本の相互貸借も可能になる」とする。「本の貸出記録が電子化されていない」「現状では」「返却のときにうっかり学校の本が混ざってしまったりするかもしれない」「市立図書館で城東女子の図書館が所蔵している本に請求があったとしても、今の状態では持ち出すことができない。それでは、相互貸借の提携をむすぶこともできない」(pp.207-208)と述べている。

また、学校図書館を利用する生徒が少ないことについて、理奈は、去年までいた司書の先生が、図書館での自習を禁止していた、四月から自習室として使って良いことにしたが、なかなか生徒が寄り付かない (p.210) と説明している。

学校図書館の選書について、主任司書の智香は、『中学校や高校の学校図書館はなによりもまず、今の生徒が読む本をできるだけ多く揃えてあげて、本に触れる機会を増やしていくことが大事だと思う』と述べ、智香と同級生で非常勤講師の理奈の話を聞いて、双葉は「市立図書館のような公共図書館と学校図書館とでは、役割や蔵書計画の立て方がかなり大きく違っている。知識としては聞いたことがあったけど、実際に運営の現場を目の当たりにしてみなければ、わからないことはたくさんある」(p.215)と感じていた。また、マンガが置かれていない、城東女子学院の図書館で、マンガを入れたら、他の先生から苦情が来ないか心配する理奈に、智香は、『最近は学校図書館や公共図書館でも、マンガを置いているところは多いんですよ。それで他の先生方を説得できると良いんですが……』(p.220)と話している。

これらの他にも、図書館のホームページ (pp.83-84)、図書館行事としてのスカベンジャー・ハント（「アメリカやヨーロッパの大学でよく行われるイベント」(p.126)と解説されている）、電動書架 (pp.147-149)、マスコットキャラクターの募集 (p.222) など、他の小説では、あまり扱われていないような内容も本文中に登場している。

本書は「司書の方がふだんされているお仕事の内容を、ストーリー形式でわかりやすく読めるように作った」(p.2)という。冒頭の部分で、稲嶺双葉の同級生の発言で『良かったじゃない、楽そうなところに就職できて。図書館の司書って、カウンターに座って本の貸出をしたり、返却された本を棚に戻したりしてればいいんでしょ?』と言われたことを紹介し、双葉は、反論したいと思うが、「図書館の司書には、利用者には見えない館内で、山のように仕事がある」(p.8)と感じていた。「図書館司書の仕事を一言で説明するのは難しい」(p.9)が、本書では、図書館の業務や職員について、本文をコラムで補うかたちで、わかりやすく説明されている。また、図書館の最近の状況を反映して、図書館運営会社とその職員の業務や、レファレンスサービスについては、とくに、くわしく扱われている。

注)

1)大橋崇行『司書のお仕事 お探しの本は何ですか?』

本書の「裏カバー折込」部分で、大橋崇行は「1978年生まれ。作家、文芸評論家、東海学園人文学部准教授」「博士（文学）」。小説や評論の著書が数点あり、「平成25年度全国大学国語国文学会『文学・語学』賞」を受賞していることが紹介されている。

また、「謝辞」として、「犬山市立図書館の小曾川真貴さん」「小牧市立図書館、愛知県図書館、千代田区立千代田図書館、東海学園大学図書館」「多くの図書館と、図書館司書の方々」(p.3)の協力があったことに対して、「厚く御礼」を述べている。

「表カバー折込」部分には、「味岡市立図書館に、新人司書として採用された稲峰双葉。そこで待っていたのは、蔵書目録の作成や、本の受け入れ作業、イベント企画……と、次々に押し寄せてくる「司書のお仕事」だった。双葉は、先輩司書の花崎智香や、山下麻美の助言を受けながら、一人前の司書として成長していくことになる」とあるように、女性の新人司書がさまざまな、図書館業務に取り組み、図書館の人間関係のなかでアドバイスを受けながら、成長していくストーリーである。

2)福島幸宏「これからの図書館員像 情報の専門家/地域の専門家として」『現代思想』vol.46、no.18、2018.12、p.173

3)「リクエストカード」の写真(撮影協力:東海学園大学図書館)が掲載され、その下には、「リクエストの通知は、マイライブラリにて行います」「近年は、リクエストボックスを設置せず、カウンターで受理するところが多い」(p.125)と説明がついている。

4)「下諏訪淳也 味岡市立図書館長」は「日本図書館協会の認定司書」(p.6)という設定だが、管理職ということで、ここではカウントされていないと思われる。

「認定司書」は「司書の図書館における実務経験や実践的知識・技能を継続的に習得した者を評価し、各地域の図書館経営の中核を担う司書として日本図書館協会が認定する者」と、日本図書館協会のホームページで解説されている。

(<http://www.jla.or.jp/committees/nintei/tabid/729/Default.aspx>)

5)佐藤毅彦「図書館の雇用形態の多様化は、フィクションの作品でどのように扱われているか——事例研究『みさと町立図書館』『図書館は、いつも静かに騒がしい』を中心に」『甲南国文』v.65、2018.3、pp.1-29

6) (<http://crd.ndl.go.jp/reference/>)

本文中(p.182)にトップ画像が表示されている。「キーワードを入れ、登録している図書館に寄せられたレファレンス相談の内容と回答が閲覧できる」と解説されている。

7)「辞書・辞典を中心にした知識源から『知りたいこと』にいち早く到達するためのデータベースです」とされている。

(<https://japanknowledge.com/>)

本文中(p.188)にトップ画面が表示されている。

8)「国内で刊行された人物事典、百科事典、歴史事典に掲載されている、古代から現代までの人物の総索引」「で、日本・外国の「分野別に再編」されている。

(http://www.nichigai.co.jp/book/biography_index.html)

9) (<https://ci.nii.ac.jp/>)

本文中 (p.191) にトップ画面が表示されている。「著者名や論文タイトルで学術論文を検索でき、一部の論文を PDF ファイルで閲覧できる」とされている。

10) (<https://ndlonline.ndl.go.jp>)

11) 「明治時代から現代までに刊行された雑誌記事、全国誌から地方誌までの雑誌記事がシームレスに検索できます」とされている。

(http://kw.maruzen.co.jp/ln/ec/ec_kousei01.html)

12) 本文の下の囲み記事「公共図書館の司書と学校教員」では、「近年では協力する分野がどんどん広がっています」「先生たちは本当に忙しいので、『明日の授業で使いたい』という要望をもらった学校司書が、慌てて公共図書館へ探しに来ることも」(p.203) とある。

章末の「コラム 学校図書館と公共図書館」では、「学校図書館で司書をしている司書教諭の資格をお持ちの先生や学校司書は」「子どもや教員に図書館のサービスを届けられるよう、工夫をしています」(p.251) 「学校司書の方が先生の代理で来館し、借りていくこともあります」(pp.252-253) と説明されている。「学校司書」という言葉は、本文中では使われていないので、ここで、注釈なしに使用されているのは、唐突な感じがする。もっとも、「司書教諭」「学校司書」の正確な位置づけやこれまでの経過・現在の学校現場における多様な実態を説明しようとするれば、膨大な文章量になると考えられるため、あえて、詳細な説明をばぶいた、とも考えられる。

本文中にある城東女子学院の図書館では、図書館担当の非常勤講師と高校生の図書委員が登場するのみで、「学校司書」は、登場しない。

13) (<https://braintech.co.jp/product/jhk/>)

「全国の中・小規模図書館に最適な多言語 (Unicode) 対応の図書館パッケージシステムです」と紹介されている。

3-3. 『エル・グレコの首飾り 青柳図書館の秘宝』1)

本書は、公共図書館に勤務した経験のある作者が執筆し、司書課程のテキストをはじめとして、図書館関係の書籍を多数出版している「樹村房」から刊行された。同じ著者により、日本史上で最初の図書館とされることがある「芸亭^{うんてい}」を公開した「石上宅嗣」が主要な登場人物として活躍する『孝謙女帝の遺言 芸亭図書館秘文書』2)が出版されている。

山口摩耶は、「大学を出」て、「有名デパートに就職した」が、「二年で卒業し」「出身大学の聴講生となって図書館司書の資格をとり、幸運にも都の試験に合格。図書館で働いている」(p.8)。この図書館の田村館長の「前職は都政調査室」で、摩耶の父は「企業の調査室に勤めていたが、互いに専門調査関協議会という組織の構成員であった」(p.30) という。「摩耶の勤める図書館は地下鉄広尾駅と六本木駅の間、広尾から歩いて十分ほどのところにあり、「図書館に行くには、やや勾配の強い公園の遊歩道を登るのが近道である」(p.88) ということで、東京都立中央図書館を想起させる設定になっている。

ある場面で、友人と『なにかわからないことがあったら図書館に、摩耶はいつも言ってるくせに』『『だったら仙台市の図書館ね』(p.55)という会話を交わしている。また、図書館のサービス内容について、「レファレンスという図書館用語は図書館人以外には馴染みの薄い言葉であるが一般的には資料相談と訳されている。もともとは蔵書の内容でわからないことや、この頃では利用者が疑問に思うことすべてを調べて差し上げるサービスになっている」と説明されている。摩耶は「ダイヤモンドを研磨する手段」についてきかれ、「質問者は若いお母さんらしい感じで、おそらく子どもの『調べ学習』の代行」のように思えたが、それを理由に断っても否定されると思って、調査に取りかかり、「出典を調べてレファレンスの回答をし」(p.89)ている。のちに、摩耶は友人に、カウンターでのレファレンスの仕事について『一番難しいのは、利用者の方がなにを調べたいのかを聞き出すことなんです』『『そのテクニックで一番有効なのが、オウム返しで聞く方法なんです』(pp.106-107)と述べている。

また、図書館長の役割について、摩耶が、館長に呼ばれて行くと「館長室から激しい大きな声が聞こえる。温厚な人だと思っていた。こんな声を荒げることもあるのか……」と思う。しばらく後に、さきほどの相手が帰ったかどうか尋ねた摩耶に対して、館長は、『『ああ、帰った帰った。人事課というのはああいうものだよ。知事が替わったからね。彼らの仕事は人員削減。僕の仕事は現場の説明。大きな声を上げるのも仕事のうちだよ……』(pp.154-155)と、話している。

具体的な図書館業務について、ふれられている場面はそれほど多くはないが、図書館での管理職もふくめた勤務経験が、反映されているところがある。

注)

1)佃一可『エル・グレコの首飾り 青柳図書館の秘宝』樹村房、2018

巻末の著者紹介には「1949年大阪市に生まれる。東京教育大学文学部卒業」「横浜市瀬谷図書館長、調査資料課長、神奈川県図書館協会企画委員長を歴任」と記されている。

2)佃一可『孝謙女帝の遺言 芸亭図書館秘文書』樹村房、2017

3-4. 『本と鍵の季節』 1)

2001年に刊行された『氷菓』2)は、アニメ化(2012年)3)、映画化:実写(2017年)4)されたが、ストーリーに、図書館が登場していた。その『氷菓』の作者、米澤穂信による『本と鍵の季節』が、2018年末に刊行された。

本書は、高校二年の「堀川次郎」「松倉詩門」がメインキャラクターの連作短編であり、ふたりが図書委員という設定で、学校図書館の場面ででてくる。5)一方で、「司書教諭」や「学校司書」など、学校図書館関係者である大人の登場人物の存在感は希薄である。

●学校図書館と図書委員

図書委員としての学校図書館での活動については、いくつかの場面で描かれている。当番として「貸出カウンターの内側」にいる堀川次郎は、返却箱に『新明解国語辞典』があ

るのに気づき、「辞書は禁帯出」だが、「図書室内で自習に使い、戻す棚が分からなくなったか、自分で戻すのが面倒になったのだろう」と思った。他にも、いたんだ本の補修や背ラベルの貼り替えを図書委員が行っている。(pp.11-14) 別の場面では、堀川と松倉の図書委員のふたりが「返却本を書架に戻し」「新着図書の受け入れ事務」をしたり、「オビを外して見返しに貼り付け、本の上と下に図書室蔵書を示す印を押し」「期限切れのポスターを掲示版から外し、新しいポスターを貼」っている。(p.105) さらに、堀川次郎は、「放課後の図書室で、僕は図書委員としての雑務に勤しんでいた。返却された本を書架に戻し、督促状を書き、傷んだ本を補修し、数少ない利用者に笑顔で貸出の手続きをしていた」(pp.203-204) という活動をしている。「司書教諭」「学校司書」など、大人の学校図書館関係者が図書館に姿を見せることはなく、学校図書館に關係する事務作業を、ほとんど、生徒の図書委員が行っているという設定になっている。

「テスト準備期間」は「部活動も委員会活動も禁止」で「図書室くらいは勉強用のスペースとして開放してもいいようなものだ、というか、いまこそ図書室の出番だと思うのだが、『図書室は図書委員が運営している』という建て前に『委員会活動は禁止とする』という建て前が重なって閉室のやむなきに至っている。司書の先生が切り盛りしてくれればいいのだが、あの人はなんというか、あまりやる気がないらしい」(pp.104-105)。同じように「図書委員の活動は禁じられているのに、図書室の通常業務は止まらない」「閉室の札を下げていても返却箱には本が返却され続け、掲示すべきポスターは届き続け、新しい本も入り続ける」「それらの処理を止めるわけにはいかない。時々誰かが片づけなければならぬし、そしてやっぱり司書の先生はなにもしてくれない」「というわけで、僕と松倉詩門は自主的かつ非合法的な残業に勤しんでいる」(p.105) のような場面がある。ここで言及されている「司書の先生」が、どのような立場で学校図書館とかかわっているのか、詳細についてはふれられておらず、「司書教諭」「学校司書」などの職種による違いが存在していることも、作者の念頭にはないものと考えられる。

●公共図書館とレファレンスサービス

ストーリーの中心となるのは、高校生で、図書委員の二人とその学校図書館における活動であるが、堀川次郎が公共図書館を利用している、以下のような場面がある。

「駅前の図書館」(p.56) に来た、堀川次郎は、「駅前のロータリーから複合ビルを見上げる。有名な建築家がデザインしたというこのビル」は、開放的で、ガラスを多用しているが、全面ガラス張りでは、「太陽の光が射し込み」「図書館の本が」「日焼けする」(p.274) と感じている。

堀川次郎は「中学生の頃はときどき来ていたけれど、今年の春から図書委員になって学校の図書室に行くようになり、自然都市の図書館からは足が遠のいていた」(p.275)。自転車に来て、図書館を利用しても、駐輪料金の割引サービスは受けられないことについて、「図書委員を務めてきたいまなら理由がよくわかる。図書館には本を借りに来る人もいるし、調べ物のために来る人もいるし、新聞を読みに来るだけの人もいるだろうし、こういう公

共図書館ならきっと冷暖房を目当てに来る人もいるはずで、図書館を利用するという言葉がなにを指すのか線引きが難しいのだ」(p.275) と思った。

「図書館に入ってすぐ、左手にカウンターがある。カウンターには『貸出』『返却』と書かれたプレートが掲げられ、そして隅の方に、『しらべもののおてつだい』と書かれた紙が貼られていた。ノートパソコンを前に、そんなに丸い眼鏡がどこに売っているのだろうと思うほど丸い眼鏡をかけた女の人が座っている。開館したばかりなのに、もう誰も来ないと確信したような気の抜けた顔をしている女の人のところへ行き、過去の新聞記事の検索をしたいと、堀川次郎は、申し出る。『過去というのはどれぐらい過去ですか』『六年です』と言うと、上の階で、階段右手奥に過去の新聞のコーナーがあり、過去記事の検索もできる、と告げられる。「右手奥に進んでいくと、人の気配がどんどんなくなっていく。壁際に書架のない小さなスペースがあり、そこに最近の新聞と縮刷版、それにやや古そうなパソコンが置かれていた。新聞のコーナーというのはこのことだろう。係の人というのが見あたらずに少し探したけれど、ほどなく初老の男の人を見つけ、口頭でパソコンの使用許可をもらった。回転いすに座ってパソコンに向かい、過去の記事を検索する画面を立ち上げ」(pp.278-279) 記事を検索していく。

また、あるところからみつかった「文庫本の表紙にはフィルムが貼られていた。文倉町立図書館と書かれたシールが張られていて、そのシールの上から油性ペンで斜線が引いてある」『『除籍本か!』』「図書館の書架は有限なので、古くなりすぎた本や直しようもないほど傷んだ本などは捨てられる。これを除籍といい、図書館によっては、この除籍された本を利用者が持ち帰れることもある」(pp.266-267) ということが紹介されている。

●貸出履歴

死んだ友人が持っていた本を探しているという三年生が学校図書館にやってくる。背ラベルがあったので図書館から借りた本と思われ、遺書がはさんであるかも知れないので、調べていると言う。亡くなった生徒の貸出履歴を見たいと言われて、図書委員の堀川次郎は「『貸出履歴は見せられません』」「うちの図書室のシステムでは、返却期限に遅れた利用者が表示されるだけで、検索はおろか、特定の利用者がどんな本を借りているかを見る機能さえない」と説明するが、「いちいち完全消去しているとも考えにくいので、データはハードディスクのどこかには残っているのだろうけれど、それをこのシステムから表示する方法はない」と思う。すると、松倉詩門が「『データが残っていたって、見せませんし教えません』」「『図書館にはルールってものがあってですね。誰がなにを借りたかは、秘密にすることになってるんです』」と説明する。

「図書館の自由に関する宣言」は「図書館の入り口に掲げられていて」「利用者の秘密を守る」とされているが、先輩は、「『たとえば警察が来て、見せろと言ったらどうするんだ』『それでもルールだからってほねつけるのか』』」と言い、「『令状があれば見せるんじゃないですか』『俺に令状を持って来いっていうのか?』』」というやりとりになる。結局、松倉詩門は「『いくら宣言があったからって、実際に警察が来てどうぞご協力と言われて、

できませんと断れる図書館ばかりだとは思えない。司書はともかく、図書館長ってのはたいてい、役場から派遣された図書館にはなんの思い入れもない人が就いてますからね『今回は特別です、どうぞご内密にってのが関の山でしょう』『令状を持って来れば見せるんだってことは、当の『宣言』にも書いてある。あんなの金科玉条でもなんでもないんだ』『どんな立派なお題目でも、いつか守れなくなるんだ。だったら守れるうちは守りたい』(pp.163-173) と言って、貸出履歴を調べる以外の方法で、調べるやり方を提示している。

学校図書館を活動の場とする、図書委員の高校生二人を中心に展開するストーリーであるが、大人の登場人物がほとんど登場せず、学校図書館の担当者についても、著者の関心から外れているように見える。6)公共図書館での調べ物や、図書館での利用履歴・利用者のプライバシーの扱いについては、一定の配慮が存在することや、図書館での実際の対応について高校生の図書委員がどのように思っているか、が描かれている。

注)

1)米澤穂信『本と鍵の季節』集英社、2018.12

本書の巻末に「一九七八年岐阜県生まれ。二〇〇一年『氷菓』で第五回角川学園小説大賞（ヤングミステリー&ホラー部門）奨励賞を受賞してデビュー」「一一年『折れた竜骨』で第六四回日本推理作家協会賞（長編及び連作短編集部門）を受賞。一四年『満願』で第二七回山本周五郎賞を受賞」と紹介されている。

2)米澤穂信『氷菓』角川書店、2001

3) (<http://www.kotenbu.com/>)

アニメに登場する、「神山市図書館」は、岐阜県の高山市図書館「煥章館」をモデルにしていることが、「高山市観光情報」で紹介されている。

(<http://kankou.city.takayama.lg.jp/2000002/2001406/2001362.html>)

4) (<http://hyouka-movie.jp/about/>)

5) 集英社の「文芸単行本公式サイト RENZABURO」(<http://renzaburo.jp/>) では、次のように紹介されている。

「堀川次郎は高校二年の図書委員。利用者のほとんどいない放課後の図書室で、同じく図書委員の松倉詩門と当番を務めている」「放課後の図書室に持ち込まれる謎に、男子高校生ふたりが挑む」「爽やかでほんのりビターな米澤穂信の図書室ミステリ」と紹介されている。

(<http://renzaburo.jp/yonezawa/>)

同サイトでは、以下に示したように、『図書館の殺人』の著作がある青崎勇吾との対談が発表されている。

米澤 どんなに社会やテクノロジーが変化しても、その時々によって変わらない悩みや葛藤がある。その核になる部分さえ押さえられたら、そこまで現代を描かなくとも、いい作品になるんじゃないかと思うんです。

青崎 変らないと言えば、学校の図書室ってこれからも変わらない気がしますね。十年後、

二十年後も変わらないものがあるとするれば、図書室の風景だと思う。

米澤 それは面白い発想ですね。

青崎 『本と鍵の季節』で一番好きなのは、図書室の本が手がかりとして出てくる「ない本」なんですよ。

米澤 ありがとうございます。あの作品では、読者がまさに手にしている本のどこかに手がかりがある、という形にすることができました。

青崎 本って思っている以上に、色々な使い方ができますよね。僕も『図書室の殺人』を書いた時には、本をためつすがめつして謎をつくりました。

米澤 といってあまりブッキッシュな雰囲気にもしたくなくて。主人公二人はふつうに本を読む高校生、という感じで描いています。

青崎勇吾『図書館の殺人』東京創元社、2016→創元推理文庫、2018

6)学校図書館の職員の配置は増えているが、正規職員は、ごく少数であることが報道されている。

「学校図書館職員、配置増も正規4%、全教調べ」『日本教育新聞』2018.10.23

(<http://www.kyoiku-press.com/post-194981/>)

3-5. 『ブラック化する職場 コミュニティユニオンの日々』1)

さいごに、2017年の刊行ではあるが、これまでにはあまりみられなかった、組合の立場から描かれた小説をとりあげる。『ブラック化する職場 コミュニティユニオンの日々』1)は、企業の労働組合を経て、コミュニティユニオンでの業務に従事した経験のある著者によって書かれている。図書館に関係する部分は、限定的であるが、これまで、公務員・正規職員以外のカテゴリに属する職員が登場する小説はあったが、本作品は、組合の立場から書かれた点が特徴である。

佐藤組合員の雇止め事件として、「佐藤は、図書館の司書として勤務していた。公共図書館の多くは現在、指定管理者制度によって大手書店にその運営が委ねられている。指定管理者は、毎年の入札によって決められる。業者の変更は、より安価な業者ということだが、建物も設備も同じなのだから、安くする部分は人件費しかない。その結果、落札した業者は人員削減をし、佐藤は失職したのだ」「行政の関係部署へ要請を行い、雇用の継続を申し入れた。要請に対し、担当者は言った。『機能が損なわれない範囲での変更は、個別企業の判断ですから』』というケースが、ユニオンの執行委員会で報告される。出席者からは、『何もできないのか』という意見も出されるが、『今の制度では、これ以上は難しいと言わざるを得ません』『落札業者にも要請しましたが、彼らは入札条件の中に人数はないと言っています』『これじゃ企業と行政が一体となった解雇じゃないか』『こんな理不尽な話、納得できませんが、現状では手の打ちようがありません』(p.57)という状況であることが説明されている。

注)

1) 竹之内宏悠『ブラック化する職場 コミュニティユニオンの日々』花伝社、2017

本書の巻末には、「石油関連企業在職中に8年間の労働争議を経て、川崎労働組合総連合事務局長を経験、その後、全川崎地域労働組合（コミュニティユニオン）書記長」「を務める傍ら」「小説家として活躍中」と記載されている。

4. 2018年の図書館状況と図書館小説

2018年「第104回全国図書館大会東京大会」1)の事務局企画プログラムとして、『夜明けの図書館』2)の作者・埜納タオ講演会が実施された。この会で、後半の質問コーナーでは、『夜明けの図書館』協力者とされる、吉田倫子3)が司会をつとめた。

図書館関係者が取材に協力したり、ストーリー展開についてアドバイスするケースは、これまでもみられたが、今回取り上げた小説でも、『カーネーション』では、「愛知県安城市アンフォーレ課・司書の市川祐子さん」、『司書のお仕事 おさがしの本は何ですか?』では、「犬山市立図書館司書の小曾川真貴さん」ほかの協力に対して、「謝辞」が記載されている。また、『エル・グレコの首飾り 青柳図書館の秘宝』は、図書館勤務経験（横浜市瀬谷図書館長、調査資料課長、など）のある著者による作品であり、『ブラック化する職場 コミュニティユニオンの日々』は、組合の活動を熟知した著者によって描かれている。そうした図書館関係者のストーリーへの様々な形での関わり方があり、実際の図書館状況が、より実態に近い形で図書館小説にも反映されているようになってきている。

たとえば、図書館職員の雇用形態の多様化については、すでにこれまでの小説の中にもとりあげられてきたが、非正規職員の実態について、『司書のお仕事 おさがしの本は何ですか?』では、図書館業務を受託する企業の存在と、そこから派遣される職員と図書館の正規職員との職務内容や業務分担が、あまりネガティブな印象にならないような配慮の下で、くわしく描かれている。一方、組合を扱った小説『ブラック化する職場 コミュニティユニオンの日々』では、非正規雇用の雇い止め、などの実態と法的な対応の困難さが描写されている。

利用者のプライバシーに対する配慮に関して、フィクションの中でどう扱われるかについては、これまでもしばしば問題点が指摘されてきたが、今回の事例の中では、学校図書館をおもな舞台とした『本と鍵の季節』で、図書委員の高校生の発言の中で「図書館の自由に関する宣言」とその図書館現場での扱われ方の現実について、言及されている。4)雇用形態の多様化がさらに進んでいけば、貸出履歴の扱いや警察の捜査への対応など、図書館での利用者のプライバシーの扱いについて、フィクションの中で描かれていく内容も変化していくことが考えられる。

注)

1)「第104回 全国図書館大会 東京大会 埜納タオ先生講演会」

(http://jla-conf-info/104th_tokyo/spproject)

2)埜納タオ『夜明けの図書館』双葉社

3)前記 1)の開催案内で、「司書（フリーランス）2017年まで横浜市立図書館に勤務」「日本図書館協会認定司書（第1090号）」と紹介されている。

(http://jla-conf-info/104th_tokyo/spproject)

4)こうした対応については、実際に図書館に勤務している著者によって書かれた「江戸川乱歩賞受賞作品」『襲名犯』において、実際の経験を踏まえ、図書館職員の心理的な側面や行動選択について、くわしく描写されていることに、下記でふれた。

佐藤毅彦「現実の図書館状況を反映したストーリーで、図書館はどのように描かれたか『襲名犯』『図書室のキリギリス』のケースについて 図書館はどうみられてきたか・15」『甲南女子大学研究紀要』vol.51、pp.1-10、2015.3

5. おわりに

2019年にはいって早々、テレビのバラエティ番組に、図書館が登場した。

テレビ東京系列で放映されている『YOUは何しに日本へ』1)で、2019年1月1日放送の『新春あけおめ“怒涛のコラボ祭り”』では、日本人の祖母の情報を探しに来た人物が、大阪市立中央図書館を訪れ、レファレンスサービスを利用する場面があった。問い合わせを受けた職員が資料を探したが、該当する地域については、空襲で記録が消失しており、祖母が通っていた可能性がある、小学校の写真を提示していた。

また、BS11tokyo で放映されている『出発！ローカル線聞き込み発見旅』2)では、2019年1月14日放送の『新潟県～秋田県・JR羽越本線』で、JR羽越本線がとりあげられた。その中で、「岩城みなと駅」に隣接する「ウェーブ岩城」にある「由利本荘市岩城図書館」を訪問して、近隣の情報を尋ねるシーンが放送された。

こうした例では、図書館で調べものをする、図書館で提供される「レファレンスサービス」の存在、が想定され、その実態の一部がテレビ番組の中で紹介されている。一方で、「くらしに役立つ図書館」「課題解決支援サービス」など「役に立つ図書館サービス」を指向する図書館政策の中で、かつて、「ビジネス支援サービス」が充実している図書館として注目を集めた「品川区立大崎図書館」3)だが、2018年、「品川リハビリテーションパーク」との複合施設内に移転・リニューアルにともない、『『ライフサポート図書館』を目指し、施設の特性を活かした『健康コーナー』を設け、健康・医療関係の資料を充実するとともに、品川リハビリテーションパークと連携して、『健康講座』を開催します』と「ビジネス支援」からは、方向が転換されている。4)

図書館を利用するがわの意識として、たとえば、『菊とバット』『和をもって日本となす』などの著作で、日本でも知られ、2018年に『ふたつのオリンピック 東京1964/2020』を刊行した、ロバート・ホワイティングは、その巻末の「エピローグ」で、「かつては、調査のために図書館に足繁く通わなければならなかった。国会図書館やアメリカ大使館の図書館にも調査にでかけては、何冊もの重い本やマイクロフィルムの山をあさった。が、いまではポケットからiPhoneを取りだせば、日本語であれ英語であれ、どちらの言語を

使ってもインターネットを検索することができ、一瞬のうちにいろんなことが見つかるようになったのだ。これは驚嘆するほかない進歩といえる」(p.565)と述べている。5)利用するがわの環境の変化によって、これまでは図書館まで行かなければ受けられなかったサービス内容が、インターネットを経由して簡単にアクセスすることが可能となっていることが、この記述の背景にある。

図書館での多様なサービスの展開を支えるはずの職員体制は、必ずしも好ましい方向に向かっているとは言えない状況にあることはすでに指摘されてきているが、たとえば、2019年になって「昨年は図書館や司書にまつわる労働問題が何度も顕在化した一年だった」とする記事が公開された。6)この記事の中では「福岡県福智町の町立図書館や歴史資料館を併設する施設『ふくちのち』の「前館長が町を相手取って提訴した」とされている。2017年3月に開館した、「福智町図書館・歴史資料館 ふくちのち」では、かつて、「市」ではない「町」としては、はじめて「図書館総合展 2017 フォーラム in 福智町」が、2017年3月27日に開催され、当時の、嶋野勝：福智町長、鳥越美奈：ふくちのち館長、も登壇していた。7)また、同じ記事の中では「東京都の練馬区立図書館では昨年12月、非常勤職員の司書でつくる労働組合が区に対してストライキを通告した」が「回避されたものの、公立図書館でストライキ通告まで労使が対立することは異例だ」。「背景には図書館職員、特に専門職であるはずの司書の待遇が全国的に悪化していることがある」と記述されている。

8)

公共図書館には、多様な利用者が来館しており、利用者をめぐるトラブルは、今回とり上げた小説の中でも描かれているが、職員体制は、人件費削減の波にさらされ、現場の職員がモチベーションを維持しがたい状況になっているところもある。たとえば、「公共施設の場合、住民の安全やサービス向上をうたいながら、現場とのそごや、利用者にかえって負担を生じさせてしまうことがままある」。「公共図書館には高齢者の姿が目立つようになり、今までならありえないトラブルが起こっている。毎朝新聞を奪い合い、負けてキレる、徘徊する、失禁してしまう老人…。このようなシニア利用者を巡って頭を悩ませる図書館は少なくない」とその実態の一部が紹介されている。9)

利用者のプライバシーの扱いをめぐっては、「苫小牧市立中央図書館が昨年4月、警察の照会を受けて特定利用者の図書の貸し出し履歴や予約記録を提供していたことが分かった」。「強制捜査の捜索差し押さえ令状のない任意協力の要請段階で情報提供した。市教委は『文部科学省から違法性はないとの回答を得ている』とするが、利用者から対応を疑問視する声も上がる」と報じられた。10)一方、「1. はじめに」でもふれたように、多数の来館者が訪れる図書館を運営している CCC が、「裁判所の令状なしに会員の氏名や住所、年齢、電話番号といった個人情報のほか、商品購入履歴やレンタルビデオのタイトルなどを警察に提供していることがあきらかになった」。「警察は『Tカードから得た情報を本人に告げてはならず、察知されるような言動も慎む』といった内部通達を出し、ひた隠しにしていた」と報じられた。11)CCCは「『長年にわたる捜査機関からの要請や協議の結果、法令

やガイドラインにのっとり、開示が適切と判断された場合のみ、必要な情報を提供すると決定した』と取材に対応している。12)図書館に関しての問い合わせには、CCC 広報が「図書館は『個人情報や貸出履歴が CCC に提供されることはない』とし、捜査当局への提供もないと説明した」という。13)

公共図書館の職員をめぐる状況の方向性について、先に紹介した雑誌の特集記事のひとつ「これからの図書館員像」というタイトルの文章で、福島幸宏は、「これからの社会情勢を念頭に置きつつ、地域もしくは集団の情報拠点として図書館を捉えなおす。さらにありうべき情報拠点に関わる〈図書館員〉とはどういった存在であるべきかを論じる。最後に、では、そのキャリアパスはどのようにあり得るべきかを論じる」とするなかで、「情報の専門家としての生き方を貫徹する方向と、幅広く地域の公共サービスに参加するあり方」(p.173)が存在する、と述べている。14)

図書館以外の読書をめぐる環境においても、たとえば、年末(2018年12月)には、有料の読書スペースを備えた書店「文喫」が東京・青山にオープンした。「6月に閉店した青山ブックセンター六本木店の跡地にオープンする文喫・六本木。『入場料を支払って入店する』というシステムが特徴的」「販売される書籍は約3万冊。雑誌を販売するエントランス部分は入場無料だが、そこから先は有料となる。入場料は1,500円」が必要だが、コーヒーは飲み放題で、時間制限もないという。15)

実態の面での図書館状況の変化を受けて、フィクションの中の図書館は、どのように描かれていくのか。巻末の「解説」で、「図書館は単に本が収められている空間ではない」「本書はそんな図書館に魅入られた作家詩人たちによる、〈図書館文学〉のアンソロジーである」とされている、『図書館情調』16)の編者・日比義高：名古屋大学大学院人文学研究科准教授による、講演「図書館を文学から覗いてみれば」が、2018年5月26日、安城市図書館情報館(アンフォーレ)で、開催された。17)当日の講演では、『図書館情調』でとりあげられた作品の他に、本稿でもふれた、大橋崇行『司書のお仕事 お探しの本は何ですか?』など、近年の作品についてもふれられていた。

さまざまな環境が変化していく中で、フィクションの作品と図書館の関係について、今後も検討の対象としていきたいと考えている。

注)

1) (<https://www.tv-tokyo.co.jp/youhananishini/>)

2) (<https://www.bs-tvtokyo.co.jp/localsen2/127.html>)

3)たとえば、「大崎図書館2階にこのほどビジネス支援図書館がオープン」「専門書や雑誌をそろえ、パソコンでデータベースを検索できる」「経営相談や企業相談、講習会などさまざまなサポートも提供していく」と報じられたこともあった。

「中小向け支援図書館、経営や起業相談も 品川・大崎 IT時代の図書館 情報拠点への変革」『朝日新聞』2004.7.23

(http://www.asahi.com/information/db/it_library1a.html)

4)「品川区立大崎図書館が6/1 移転リニューアル開館 全国初 医療・福祉施設に公共図書館が併設」『図書館流通センター』平成30年(2018年)6月1日リリース

5)ロバート・ホワイトティング 玉木正之・訳『ふたつのオリンピック 東京 1964/2020』KADOKAWA、2018

表紙カバーには、「1942年、米国ニュージャージー州生まれ。大学在学中、合衆国空軍に入隊して来日。除隊後は上智大学で政治学を専攻した。出版社勤務などを経て、日米の文化をテーマとした執筆活動を開始」し、『菊とバット』『和をもって日本となす』など、多数の著作がある、と紹介されている。

6)「街の図書館が『6割非正規頼み』の厳しい現実 過去16年間の都道府県別データをビジュアル化」『東洋経済オンライン』2019.1.26

(<https://www.toyokeizai.net/articles/-/260901>)

7)図書館における非正規雇用をめぐる訴訟案件に関しては、「足立区が民間企業に運營業務を委託している『区立図書館』で働いていた女性司書(52)が雇い止めされたことに対して」「裁判を起し雇用の継続などを求めている」が、「東京地裁は(2015年)3月12日」「女性の訴えを認め、会社に未払い賃金の支払いを命じる判決を下した」のようなケースもあったが、実態としては、多くの図書館現場で厳しい状況が続いていると考えられる。

「図書館司書『雇い止め』に無効判決——『時給百数十円』の時間外作業に抗議した女性」『弁護士ドットコムニュース』

(https://www.bengo4.com/other/1146/1307/n_2803/)

8) (<https://www.libraryfair.jp/news/5517>)

9)「キレル、徘徊する、失禁する…リアルな日本の図書館ウォーズ」『週刊実話 WEEKLY JITSUWA NEWS』2019.1.9

(<http://wjn.jp/article/detail/6746805/>)

10)「警察へ利用者情報 任意協力の提供に疑問視も一苦小牧市立中央図書館」『苦小牧民報』2018.1.13

(<https://www.tomamin.co.jp/news/main/15068/>)

11)「『Tカード』個人情報など警察に無断提供 商品購入履歴まで」『日刊ゲンダイ』2019.1.21

(<https://www.nikkan-gendai.com/articles/view/news/245894>)

12)「Tカード情報、令状なく提供 規約明記せず、レンタル商品名なども」『サンケイスポーツ』2019.1.20

(<https://www.sansupo.com/geino/news/20190120/sot19012021130010-nl-.html>)

13)「Tカード情報提供問題、武雄市図書館など問い合わせ」『佐賀新聞』2019.1.22

(<https://www.saga-s.co.jp/articles/-/328049>)

この件については、日本図書館協会図書館の自由委員会発行のニュースレター『図書館の自由』でも扱われ、関連記事が紹介されている。

- 『図書館の自由』日本図書館協会図書館の自由委員会 no.103、2019.2
「警察からの照会による利用情報の提供」 pp.3-5
「令状なしに顧客情報を提供する企業など」 pp.6-7
- 14) 福島幸宏「これからの図書館員像 情報の専門家/地域の専門家として」『現代思想』vol.46、no.18、2018.12、pp.172-180
- 15) (<http://www.cinra.net/report/201812-bunkitsu>)
- 16) 日比嘉高・編『図書館情調 シリーズ紙礫 9』皓星社、2017
- 17) 「2018 年度中部図書館情報学会講演会 図書館を文学から覗いてみれば」日比嘉高・名古屋大学大学院人文学研究科准教授、2018.5.26、アンフォーレ（安城市図書館情報館）1 階

(本文中で参照した web ページは、2019 年 2 月の時点で公開されていたものです)